三重県埋蔵文化財調査報告146－1－1

櫛田地区内遺跡群発掘調査報告II

池ノ端地区
かん志ゆう地区

1997・3

三重県埋蔵文化財センター

序　　文

県下のほ場整備率はすでに80％を越え、農業基盤整備事業は、農地整備から農村環境の総合整備へとさらに移行してきています。それに従い、事業内容が多様化し、小規模で緊急かつ短期間なものが増加しています。そういった状況の中で、埋蔵文化財の調査も小規模発掘調査件数の急激な増加、調査可能期間の集中化、年度途中の事業計画の変更に伴う調査計画の混乱等、年間発掘調査面積の数字だけでは計れない厳しい事態となっています。

農業基盤整備事業関係に限らず、埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しさを増してきており、各種の公共事業と文化財保護法のいう「貴重な国民的財産」である文化財とがいかに共存していくかという古くて新しい課題について改めて考えさせられる日々が続いています。本年度も関係機関と保存協議を重ねたうえで、工法上どうしても破壊が避けられないところに限り発掘調査を実施いたしました。農林水産部関係の事業にかかる発掘調査だけでも18遺跡になります。

調査後やむをえず破壊されたこれらの遺跡について、わたくしどもに課せられた重要な責務の一つとして、発掘調査で得られた膨大な記録を整理し、報告書という目に見える形で公開するということがあります。現地での発掘調査に追われ、十分な整理期間が確保できない現状ですが、今年度もかろうじて報告書を刊行できることとなりました。この農業基盤整備事業関係の一連の報告書が、歴史と文化に対する理解の深まりの一助になることを期待してやみません。

なお、文化財保護法の精神を尊重され、協議から発掘調査に至るまで多大のご理解とご協力をいただいた県農林水産部の各関係機関の方々、また、現地での調査にあたってご助力をいただいた各土地改良区、各市町村教育委員会をはじめ地元の方々にたいして、文末となりましたがここに心からのお礼を申し上げる次第でございます。

平成９年（1997）年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　奥　村　敏　夫

例　　言

1　本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。なお、平成８年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査全体の調査経過および協議遺跡一覧を前言として記載した。

櫛田地区内遺跡群

池ノ端地区　　松阪市櫛田町字池ノ端

かん志ゆう地区　　松阪市櫛田町字かん志ゆう

2　本書は、平成８年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第１分冊－１である。

3　調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を受け三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元市町村が負担した。

4　調査および整理の体制は下記による。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課・管理指導課

5　調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所、櫛田土地改良区および地元の方々、松阪市教育委員会に協力をいただいた。

6　各遺跡の報文執筆は基本的に現地調査担当者があたり、その名を目次および文末に明記した。

7　本書の方位は、真北を用いた。なお、磁針方位は、各遺跡とも西偏６度20分（平成３年、国土地理院）である。

8　本書で用いた遺構表示記号は、下記の通りである。

ＳＢ＝掘立柱建物　　ＳＫ＝土坑　　ＳＤ＝溝　　ＳＦ＝竈

ＳＸ＝墓　　Ｐit＝柱穴

9　本書で報告した記録類や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

10　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ．前　　言 ……（前川　嘉宏）……1

Ⅱ．位置と環境 ……（木野本和之）……5
　1．はじめに ……5
　2．位置と環境 ……8

Ⅲ．池ノ端地区 ……（木野本和之）……9
　1．遺構 ……9
　2．遺物 ……12
　3．結語 ……19

Ⅳ．かん志ゆう地区 ……（高田恵理子）……29
　1．遺構 ……29
　2．遺物 ……34
　3．結語 ……40

図版目次

図版１　池ノ端地区　作業風景・ＳＸ３実測風景 ……21
図版２　池ノ端地区　調査後全景 ……22
図版３　池ノ端地区　ＳＸ３遺物出土状況 ……23
図版４　池ノ端地区　ＳＦ７ ……24
図版５　池ノ端地区　出土遺物(1) ……25
図版６　池ノ端地区　出土遺物(2) ……26
図版７　池ノ端地区　出土遺物(3) ……27
図版８　池ノ端地区　出土遺物(4) ……28
図版９　かん志ゆう地区　Ａ地区全景 ……44
図版10　かん志ゆう地区　ＳＤ１土層断面・Ｂ地区全景 ……45
図版11　かん志ゆう地区　Ｂ地区ＳＢ７・ＳＫ４～６ ……46
図版12　かん志ゆう地区　出土遺物(1) ……47
図版13　かん志ゆう地区　出土遺物(2) ……48

挿図目次

第１図　平成８年度本調査・立会調査遺跡位置図 …… 4
第２図　櫛田地区内遺跡群位置図 …… 5
第３図　櫛田地区内遺跡群地形図 …… 6
第４図　櫛田地区内遺跡群調査区位置図 …… 7
第５図　池ノ端地区　遺構平面図 ……10
第６図　池ノ端地区　土坑墓ＳＸ３遺物出土状況 ……11
第７図　池ノ端地区　竈ＳＦ７実測図 ……11
第８図　池ノ端地区　出土遺物実測図(1) ……13
第９図　池ノ端地区　出土遺物実測図(2) ……14
第10図　池ノ端地区　出土遺物実測図(3) ……15
第11図　池ノ端地区　出土遺物実測図(4) ……16
第12図　池ノ端地区　出土遺物実測図(5) ……16
第13図　かん志ゆう地区　遺構平面図 ……31～32
第14図　かん志ゆう地区　ＳＢ７平面図・断面図 ……33
第15図　かん志ゆう地区　Ａ地区出土遺物実測図 ……35
第16図　かん志ゆう地区　Ｂ地区出土遺物実測図(1) ……36
第17図　かん志ゆう地区　Ｂ地区出土遺物実測図(2) ……37

表　目　次

第１－１表　平成８年度　農林水産部関係事業地内遺跡一覧表(1) …… 2
第１－２表　平成８年度　農林水産部関係事業地内遺跡一覧表(2) …… 3
第２表　平成８年度　本調査・立会調査遺跡一覧表 …… 4
第３表　池ノ端地区　遺構一覧表 ……12
第４表　池ノ端地区　出土遺物観察表(1) ……17
第５表　池ノ端地区　出土遺物観察表(2) ……18
第６表　池ノ端地区　出土遺物観察表(3) ……19
第７表　かん志ゆう地区　遺構一覧表 ……30
第８表　かん志ゆう地区　出土遺物観察表(1) ……38
第９表　かん志ゆう地区　出土遺物観察表(2) ……39
第10表　安濃津遺跡群ＳＤ176出土土器構成（口縁部計測） ……42
第11表　安濃津遺跡群ＳＤ176出土土器構成（破片数） ……42
第12表　岩出遺跡群ＳＥ381出土土器組成 ……42
第13表　かん志ゆう地区　ＳＤ１出土遺物組成表（口縁部計測） ……43
第14表　かん志ゆう地区　ＳＫ１出土遺物組成表（口縁部計測） ……43
第15表　かん志ゆう地区　ＳＫ２出土遺物組成表（口縁部計測） ……43
第16表　かん志ゆう地区　ＳＫ５出土遺物組成表（口縁部計測） ……43
第17表　かん志ゆう地区　破片数量 ……43

Ⅰ．前　　言

平成８年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査の経過

三重県教育委員会では、県の開発関係各課に対して、例年夏に翌年度の各種公共事業計画について事業照会を行い、開発事業地域内における埋蔵文化財の確認とその保護に努めている。

平成８年度各種公共事業計画については、平成７年８月に事業照会が行われ、農林水産部関係については、農村振興課、農地整備課等関係各課から回答がよせられた。

事業照会の回答に基づき、三重県埋蔵文化財センターでは、事業予定地内における遺跡の有無の確認作業に入り、遺跡台帳との照合による周知の遺跡の確認と現地での分布調査を実施した。

その結果、平成８年１月末時点で、一部前年度試掘済みの遺跡を含めて、事業予定地内には92か所、約126万㎡の遺跡あるいはその可能性が考えられる場所があることが判明し、平成８年２月にその旨を関係各課に報告した。

例年、２月から３月にかけて、分布調査結果報告にもとづいた試掘調査が集中して実施されるのであるが、平成８年度事業においては、事業計画が流動的なものが多く、平成７年度内に試掘調査ができない遺跡がかなりあった。年度内試掘が可能な遺跡の調査が終了した３月上旬の時点で、事業予定地内に存在する遺跡は、本調査が必要なものが27遺跡（約94,000㎡）、試掘調査が必要なもの60遺跡（約740,000㎡）であった。そこで、これらの調査結果を関係各課へ報告するとともに遺跡を保護するために盛土対応等の工事設計の変更を要請した。

平成８年３月下旬に、教育委員会文化芸術課、埋蔵文化財センター、農地整備課、農村振興課、県下各農林事務所の五者で、各遺跡の対応について設計変更後の協議を行った。再度設計変更を要請した事業もあったが、現状保存が困難な遺跡については、発掘調査を実施することとなった。この時点では、未試掘遺跡を含む26遺跡（18,048㎡）を平成８年度に本調査することで合意した。

現地調査は、例年５月の連休明けから開始している。平成８年度においても、連休明け早々に曽祢崎古墳群・曽祢崎遺跡の調査を開始し、平成９年１月中旬に櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区の調査が終了して本年度の現地における農林基盤整備事業に伴う本調査・立会調査が完了した。

本年度の本調査・立会調査においては、年度途中の事業計画の変更、本調査直前に実施した試掘調査結果による調査面積の減少等がかなりあり、最終的には、本調査15遺跡（10,810㎡）、立会調査３遺跡（88㎡）となった。

なお、例年、現地での発掘調査がほぼ終了した時点で、その結果を広く一般県民に公開する目的で現地説明会を開催している。本年度は、７月に曽祢崎古墳群・曽祢崎遺跡と門阪遺跡、11月に野田遺跡・研山遺跡と西山遺跡、12月に登り遺跡で開催している。また、県下各地の団体から遺跡説明等の申請があれば、可能な限り受けるようにしている。本年度は11月に松阪市立漕代幼稚園で中の坊遺跡、12月に上野市比自岐公民館で鷲ヶ尾古墳群、３月に松阪市立漕代公民館で中の坊遺跡の調査説明会を行った。

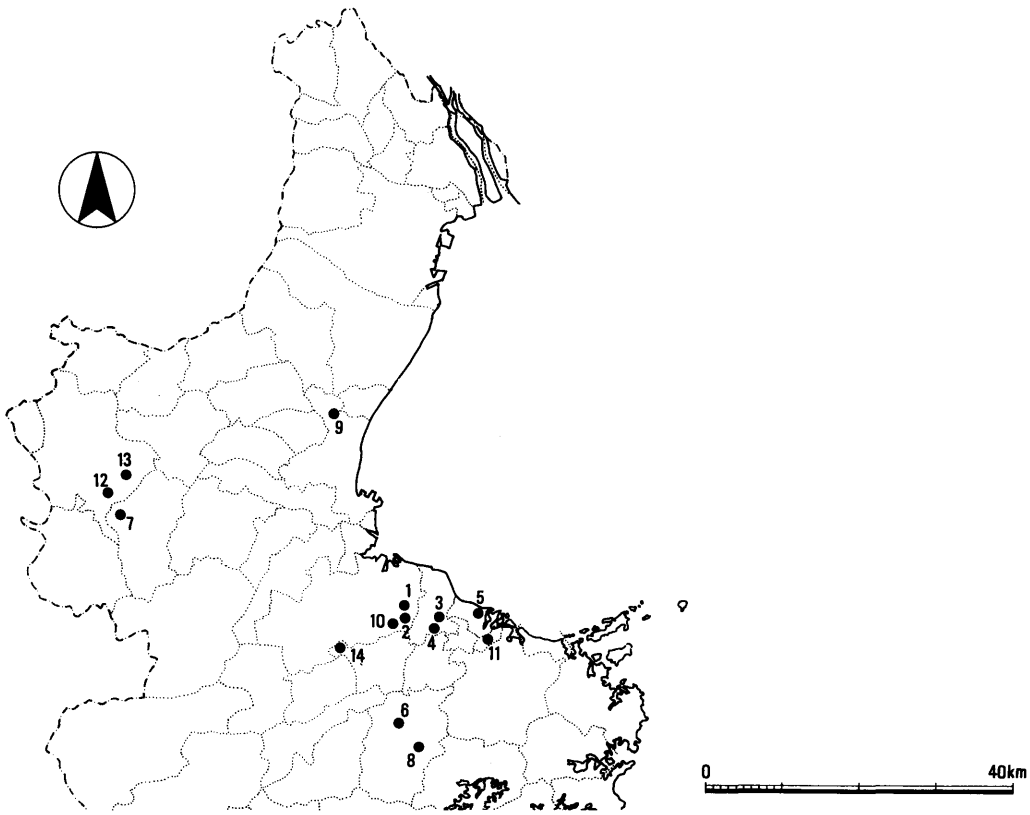
（前川嘉宏）

事務所	事業名	地区名	遺跡名	所在地	事業地内分布面積（㎡）	試掘調査結果			対応等
						面積(㎡)	時代	概要	
四日市農林	畜環	鈴亀	畑ヶ田遺跡	鈴鹿市東庄内町	21,900	5,500	鎌倉～室町	ピット、土坑。	要試掘部分地区除外。事業次年度。
			北ノ垣内遺跡	鈴鹿市東庄内町	7,500				要試掘部分地区除外。
			上田遺跡	亀山市阿知本町	53,000	5,000	鎌倉～室町	ピット、土坑。	事業H９年度。
津農林水産	ほ場整備	榊原	仮）谷杣Ａ遺跡	久居市榊原町	3,500	－	－	遺構なし。陶器少量。	施工可。
		其村	仮）其村遺跡	一志郡一志町其村	42,000	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
	かん排	中勢	大名塚古墳群	安芸郡安濃町草生	150				要試掘。事業次年度以降。
	湛水防除	安東	納所遺跡	津市納所町					慎重工事。
			蔵田遺跡	津市納所町					慎重工事。
	土地総合	井生	宮ノ東遺跡	一志郡一志町井生	試掘総延長2,300m	2,400	古墳～中世	ピット、土坑、溝。	農道舗装。事業次年度。
			笠月遺跡	一志郡一志町井生		1,400	弥生～中世	ピット、土坑。	農道舗装。事業次年度。
			高畑遺跡	一志郡一志町井生		800	弥生～中世	ピット、土坑。	農道舗装。事業次年度。
			笹遺跡	一志郡一志町井生		2,400	弥生～中世	ピット、土坑、溝。	農道舗装。事業次年度。
	ふるさと農道	大里	南所遺跡	津市大里野田町	1,000	1,000	中世	H２年度試掘。	拡幅部分のみ立会調査46㎡実施。
			大里西沖遺跡	津市大里野田町	125	125	縄文～近世	H２年度試掘。	拡幅部分のみ立会調査12㎡実施。
			若林遺跡	津市大里野田町	1,000	1,000	近世～	H２年度試掘。	慎重工事。事業次年度。
	一般農道	久居東部	赤坂遺跡	久居市木造町	1,200				要試掘。事業次年度。
	農免農道	津北部２期	豊野遺跡	津市一身田豊野	200				要試掘。事業次年度。
			豊野古墳	津市一身田豊野	200	－	－	遺構なし。	施工可。
松阪農林	ほ場整備	櫛田	塔ノ本地区	松阪市櫛田町	19,500	20,000			事業H９年度。
			倉垣内地区	松阪市櫛田町	10,000				要試掘。事業H９年度。
			雨寺地区	松阪市櫛田町	11,000	11,000	中世	溝、土坑。	工事対応。
			奥ノ垣内地区	松阪市櫛田町	22,000	22,000	中世～近世	ピット、溝、土坑。	本調査1,600㎡実施。他は工事対応。
			池ノ端地区	松阪市櫛田町	750	750	中世～近世	溝、土坑。	本調査200㎡実施。他は工事対応。
			かん志ゆう地区	松阪市櫛田町	19,600	8,600	中世	ピット、溝。	本調査210㎡実施。他は工事対応。
			川原田遺跡	松阪市櫛田町	8,800,	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
			銭掛松遺跡	松阪市清水町	6,500	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
		櫛田上	石川田遺跡	松阪市豊原町	35,000	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
			志のだ遺跡	松阪市豊原町	2,400	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
		漕代	保山垣外遺跡	松阪市稲木町	11,000				要試掘部分地区除外。
			田垣外遺跡	松阪市稲木町	11,800				全域地区除外。
			外揚遺跡	松阪市稲木町	66,800	2,800	平安	ピット、土坑。	工事対応。
			安田遺跡			1,200	平安末	土坑。土師器、山茶椀。	工事対応。
			風呂屋垣外遺跡			2,300	平安～鎌倉	土師器多数。	工事対応。
			古垣内遺跡	松阪市稲木町	4,400	3,300	奈良～中世	土器多量。	工事対応。要試掘部分地区除外。
			西浦川原遺跡	松阪市稲木町	2,600				要試掘。事業次年度。
			萱原通遺跡	松阪市稲木町	18,000				要試掘。事業次年度。
			惣作遺跡	松阪市稲木町	12,000	－	－	遺構なし。土師器少量。	施工可。
			往生寺山遺跡	松阪市高木町	59,000	－	－	－	全域砂利採集済。
			古轡通りＡ遺跡	松阪市早馬瀬町	3,500	700	奈良～	土師器出土。	事業次年度以降。
			古轡通りＢ遺跡	松阪市早馬瀬町	3,200	3,200	弥生～平安	H５年度松阪市教委。	事業次年度。
			中の坊遺跡	松阪市目田町	44,600	21,800	古墳～中世	土坑、溝。	本調査1,300㎡実施。他は工事対応。
			三昧後遺跡	松阪市伊勢場町	44,000	500	中世	土師器、鉄器。	地区除外。
			向河原遺跡	多気郡明和町竹川	30,000	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
		明星	角垣内遺跡	多気郡明和町蓑村	5,800	2,700	平安～中世	ピット、土坑、溝。	立会調査30㎡実施。他は工事対応。
			五反田遺跡	多気郡明和町蓑村	5,000				事業消滅。
			曽祢崎古墳群	多気郡明和町上野	2,400	1,200	古墳	円墳３基。	本調査1,200㎡実施。
			北沢遺跡	多気郡明和町上野	36,000	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
		四疋田	二ノ久保遺跡	多気郡多気町四疋田	1,200	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。

第１－１表　平成８年度農林水産部関係開発事業地内遺跡一覧表（1）

事務所	事業名	地区名	遺跡名	所在地	事業地内分布面積（㎡）	試掘調査結果			対応等
						面積(㎡)	時代	概要	
松阪農林	畜環	多気勢和	川ノ上遺跡	多気郡多気町牧	5,500	1,500	中世	ピット。	工事対応。
			堂ノ前遺跡	多気郡多気町牧	9,400	700	中世	H４年度試掘。	工事対応。
			門阪遺跡	多気郡多気町牧	7,700	800	中世	H４年度試掘。	本調査800㎡実施。
			浅間山南遺跡	多気郡多気町牧	1,000	－	－	遺構なし。瓦。	施工可。
			浅間山北遺跡	多気郡多気町牧	9,000	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
			花ノ木遺跡	多気郡多気町牧	15,000	5,000	弥生～中世	ピット。	事業次年度。
			奥ホリ遺跡	多気郡多気町牧	21,000	12,000	縄文～中世	ピット、土坑。	事業次年度以降。
			祭神遺跡	多気郡多気町牧	15,000	－	－	遺構なし。土器少量。	施工可。
			川原街道遺跡	多気郡多気町牧	7,500	2,000	中世	ピット、土坑。	事業次年度以降。
			スサキ遺跡	多気郡勢和村片野	6,800	1,100	縄文～中世	ピット。	事業次年度。
			縁通庵遺跡	多気郡勢和村片野	29,250	10,000	縄文～中世	ピット、土坑。	事業次年度。
			アカリ遺跡	多気郡勢和村片野	23,000	11,800	縄文～中世	ピット、溝。	事業次年度。
			ソウダ遺跡	多気郡勢和村片野	13,500	4,200	縄文		事業次年度以降。
	ふるさと農道	上川	山添遺跡	松阪市山添町	700	300	中世	ピット。	本調査300㎡実施。
伊勢農林水産	ほ場整備	伊勢北部	高ノ御前遺跡	伊勢市有滝町	30,000	14,000	古墳	ピット、土坑。	本調査400㎡実施。他は工事対応。
			松葉遺跡	伊勢市有滝町	40,000	－	－	遺構・遺物なし。	施工可。
		中川	野田遺跡	度会郡度会町長原	14,000	6,000	中世	ピット、土坑。	本調査640㎡実施。他は工事対応。
			研山遺跡	度会郡度会町長原	20,000	5,000	中世	ピット、土坑。	本調査360㎡実施。他は工事対応。
	中山間	小川郷上	登り遺跡	度会郡度会町火打石	1,500	1,000	近世	ピット、溝。	本調査600㎡実施。他は工事対応。
	ふるさと農道	度会北部	里Ａ遺跡	度会郡度会町鮠川	1,000	190	中世	土坑。	要試掘。
			里Ｂ遺跡	度会郡度会町鮠川	5,000				要試掘。
		御薗	里中遺跡	度会郡度会町長屋	2,000	550	中世	ピット、土坑。	本調査550㎡実施。他は工事対応。
			高向遺跡	度会郡度会町高向	3,350				要試掘。
	漁港関連	答志島	大畑遺跡	鳥羽市答志	900				要試掘。
上野農林	ほ場整備	柘植川沿岸	道垣外遺跡	阿山郡伊賀町下柘植	120,000	－	－	遺構・遺物なし。	施工可。
		羽根	西山遺跡	名賀郡青山町羽根	36,000	2,000	中世	ピット、土坑。	本調査740㎡実施。他は工事対応。
			中出向遺跡	名賀郡青山町羽根	153,000	250	中世	ピット。	本調査250㎡実施。
			間所遺跡	名賀郡青山町羽根		250	古墳？	石室？	本調査60㎡実施。
	農免農道	上野南部２期	南山６号墳	上野市古郡	350				要試掘。
			南山７号墳	上野市古郡	200				要試掘。
			東代遺跡	上野市古郡	500				慎重工事。
			（仮）東代古墳	上野市古郡	300				慎重工事。
			城之越遺跡	上野市比土	1,000	600	古墳	ピット、土坑。	本調査600㎡実施。
			城之越Ｃ遺跡	上野市比土	2,400				要試掘。事業次年度以降。
		上野依那古	鳥羽遺跡	上野市沖	1,300				要立会。事業次年度。
	広域農道	伊賀３期	重富氏館跡	上野市比自岐	6,000				要試掘。事業次年度以降。
			荒堀氏館跡	上野市比自岐					要試掘。事業次年度以降。
			中川氏館跡	上野市比自岐	3,000				要試掘。事業次年度以降。
			竹岡氏館跡	上野市比自岐					要試掘。事業次年度以降。
			向山１号墳	上野市比自岐					要試掘。事業次年度以降。
			鷲ヶ尾古墳群	上野市摺見	1,100	1,000	古墳	円墳２基。	本調査1,000㎡実施。
			地蔵川遺跡	上野市比自岐	1,000	－	－	土器少量。	施工可。
			石原１号墳	上野市比自岐	400	－	－	遺構・遺物なし。	施工可。
			石原２号墳	上野市比自岐	900	－	－	遺構・遺物なし。	施工可。

第１－２表　平成８年度農林水産部関係開発事業地内遺跡一覧表（2）



第１図　平成８年度本調査・立会調査遺跡位置図

事業	No.	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	現地調査期間	現地調査担当者	備考
県ぽ	1	奥ノ垣内地区	松阪市櫛田町字奥ノ垣内ほか	1,600	H8.11.14～H9.1.16	日栄智子・佐藤　公	
		池ノ端地区	松阪市櫛田町字池ノ端	200	H8.10.22～10.25	木野本和之	
		かん志ゆう地区	松阪市櫛田町字かん志ゆう	210	H8.10.16～10.21	高田恵理子	
	2	中の坊遺跡	松阪市目田町字中の坊	1,300	H8.8.19～11.22	伊藤裕之・石渕誠人	スライド説明会H8.11.16、40名参加。 スライド説明会H9. 3.12、50名参加。
	3	曽祢崎古墳群 曽祢崎遺跡	多気郡明和町上野字曽祢崎	1,200	H8.5.7～8.22	西村美幸・林　義巳・筒井正明	現地説明会H8.7.21、70名参加。
	4	角垣内遺跡	多気郡明和町蓑村字角垣内	30	H8.7.18	前川嘉宏	立会調査。
	5	高ノ御前遺跡	伊勢市有滝町字高御前	400	H8.10.7～11.14	日栄智子	
	6	野田遺跡	度会郡度会町長原字野田	640	H8.10.15～11.26	越賀弘幸・林　義巳	現地説明会H8.11.16、40名参加。
		研山遺跡	度会郡度会町長原字研山	360			
	7	西山遺跡	名賀郡青山町羽根字西山	740	H8.11.5～12.27	筒井正明	現地説明会H8.11.28、30名参加。
		中出向遺跡	名賀郡青山町羽根字中出向	250			
		間所遺跡	名賀郡青山町羽根字間所	60			
中山	8	登り遺跡	度会郡度会町火打石字登り	600	H8.12.3～12.26	西村美幸・林　義巳	現地説明会H8.12.23、100名参加。 旧称下り遺跡
ふるさと	9	南所遺跡	津市大里野田町字南所	46	H8.12.9	伊藤裕之	立会調査。
		大里西沖遺跡	津市大里野田町字西沖	12	H8.12.9	伊藤裕之	立会調査。
	10	山添遺跡	松阪市山添町字真土	300	H8.11.18～12.5	坂倉一光	
	11	里中遺跡	度会郡御薗村長屋字里中	550	H8.9.11～10.21	林　義巳・越賀弘幸	
農免	12	城之越遺跡	上野市比土字城之越	600	H8.8.19～10.11	木野本和之・高田恵理子	
広域	13	鷲ヶ尾古墳群	上野市摺見字鷲ヶ尾	1,000	H8.7.22～10.31	筒井正明・坂倉一光	スライド説明会H8.12.7、50名参加。 旧称地蔵川古墳群
畜環	14	門阪遺跡	多気郡多気町牧字門阪	800	H8.6.24～7.30	越賀弘幸・伊藤裕之	現地説明会H8.7.27、40名参加。
計		18　遺跡		10,898			

第２表　平成８年度本調査・立会調査遺跡一覧

II．位置と環境

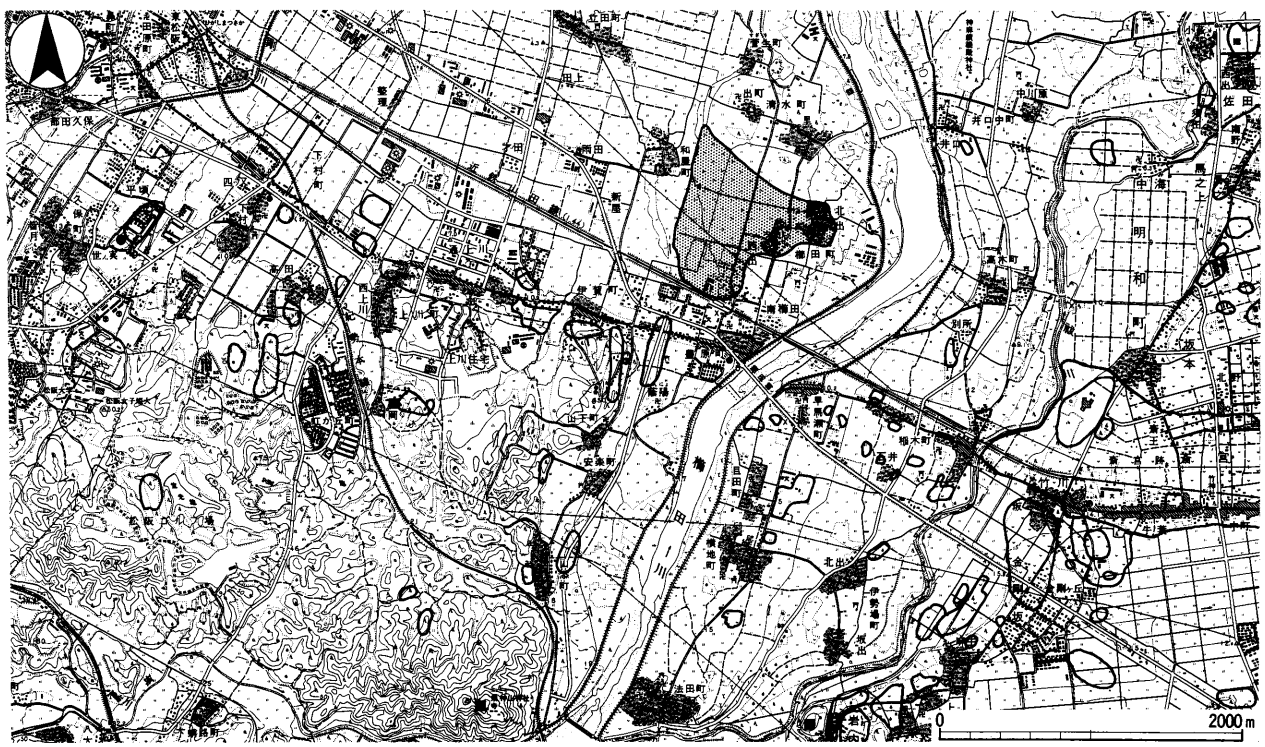
1　はじめに

三重・奈良の県境を成す台高山系に源を発する櫛田川は、緩やかな蛇行を繰り返しながら東流する。上流部では宮ノ谷に代表される渓谷、中流部では河岸段丘、そして下流部では肥沃な平野を形成し伊勢湾に注ぐ、南伊勢地方第２の河川である。

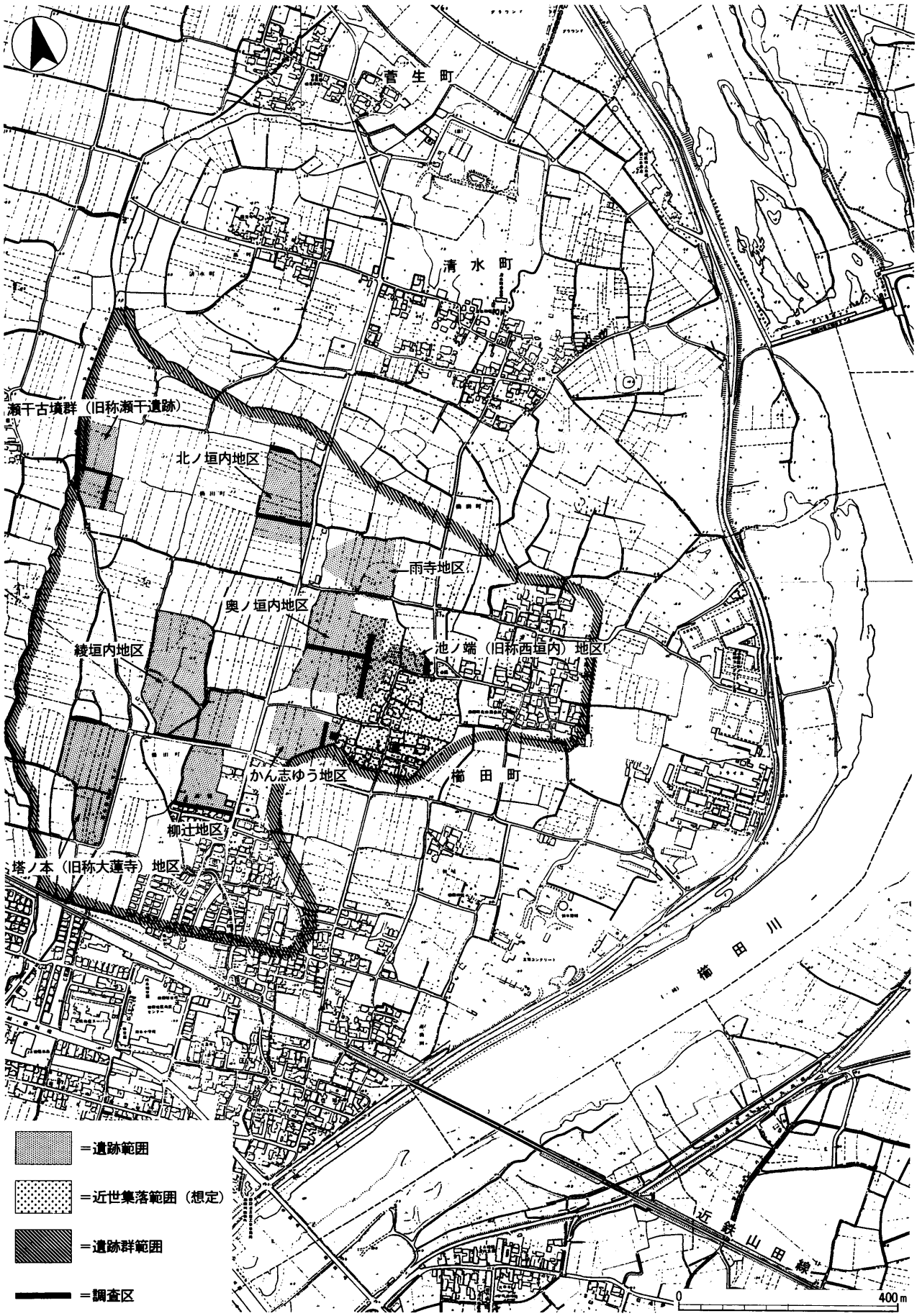
松阪市櫛田町は、櫛田川左岸の沖積平野に位置する。松阪市東部の穀倉地帯で、一帯には条里地割りの痕跡を色濃く残す広大な田園風景が広がる。また一部には、整然とした条里地割りの中に旧河道の痕跡を示す畦畔が残り、現河道と祓川の間で乱流を続けた櫛田川の姿を物語る[1]。

当地区では、これまでに県営ほ場整備事業（櫛田地区）にかかる事前の試掘調査により、地区内の各所で遺跡の存在が確認されている。そして、平成７年度からは破壊を余儀なくされる部分についての埋蔵文化財発掘調査が開始され、瀬干遺跡・綾垣内遺跡・柳辻遺跡・大蓮寺遺跡・北ノ垣内遺跡の発掘調査結果が公表されている[2]。この調査によって弥生時代～中世に至る各時代の遺構・遺物が確認された。そして、平成８年度には櫛田集落周辺の奥ノ垣内遺跡・西垣内遺跡・かん志ゆう遺跡の発掘調査が実施され、その結果、当地区内には中・近世を中心に各時代の遺跡が広く散在的かつ複合的に分布することが判明した。また、本年度の調査によって奥ノ垣内遺跡と西垣内遺跡は明らかに同一の遺跡であることが明らかになり、字別に遺跡名を付けることによる矛盾が生じてきた。そこで、本報告書からは大きく「櫛田地区内遺跡群」として把握し、以下のように個別に地区名（字名）を冠することで将来に備えたい。ただし西垣内地区については、調査範囲全体が字「池ノ端」に含まれることが判明したため、本報告書から「池ノ端」地区と改称し、以後はこれを使用する。

これまでの試掘調査・本調査の結果と地形的条件を勘案して、遺跡群の範囲は第３図に示した通り現在の櫛田町地内に限定した。しかし、現在のところ櫛田町と豊原町の境界部分は宅地化の進行によって試掘調査等が不可能な状況下にある。したがって、遺跡群の南限については多分に不確定な要素を含ん



第２図　櫛田地区内遺跡群位置図 1:50,000（国土地理院 1:25,000「松阪」から）



第３図　楠田地区内遺跡群地形図 1:5,000（松阪市都市計画図 1:2,500から）

第4図　櫛田地区内遺跡群調査区位置図 1:2,000

でいる[3]。

（旧　称）	（改　称）	
瀬干遺跡	瀬干古墳群	（櫛田地区内遺跡群）
綾垣内遺跡	綾垣内地区	
柳辻遺跡	柳辻地区	
大蓮寺遺跡	大蓮寺地区	
北ノ垣内遺跡	北ノ垣内地区	
奥ノ垣内遺跡	奥ノ垣内地区	
西垣内遺跡	池ノ端地区	
かん志ゆう遺跡	かん志ゆう地区	

2　位置と環境

櫛田地区内遺跡群は、松阪市櫛田町地内に広がる面積約630,000㎡の広大な遺跡である。地形的に見ると、櫛田川左岸に形成された標高８ｍ前後の沖積平野・自然堤防上に立地している。

当遺跡周辺の歴史的環境は、平成７年度の第１次調査、周辺での調査の報告書に記載されており、それぞれ詳しく記述しているので繰り返さない[4]。昨年度の調査によって、当地の歴史を解明していく上で貴重な成果を上げることができた。その要点をまとめると、少なくとも当地において人々の生活は弥生時代にまで遡ること、瀬干地区において古墳時代初頭の古墳群が存在すること、現在見られる畦畔と同じ方向の溝が奈良・平安期にも存在したこと、である。平成８年度には第２次調査として、奥ノ垣内・池ノ端・かん志ゆうの３地区の調査が実施され、さらに詳細な状況が確認された。そこで、本項では第２次調査終了以降に判明したことに若干触れておく。

平成９年度県営ほ場整備事業に伴い、当センターは同年３月に倉垣内・塔ノ本地区の試掘調査を実施した。倉垣内地区においては遺構は確認できなかったが、塔ノ本地区ではピット・土坑・溝等の遺構が確認され、複数の試掘坑からは奈良時代の瓦が出土した。この地域には、かつて大雷寺という寺院が存在したという伝承がある。試掘箇所から東に約700ｍ程の地点では、かつて砂利採取時に大量の古瓦が出土し、大雷寺廃寺（市遺跡№332）と推定されてきた[5]。しかし、瓦が地表面下３～４ｍから出土していること、地形的に見ても櫛田川の旧流路部分に相当することから、大雷寺の寺域は別の場所に求められそうである。ちょうど今回の試掘地点は、周辺の条里地割り跡とは異なるほぼ真北方向の地割りの中に位置し、調査地の字名「塔ノ本」をはじめ周辺には寺院に関係する字名が多く存在する。また、瓦は櫛田町から和屋町にかけての広範囲から出土している[6]。これら判明した事実を総合すると、塔ノ本地区に奈良時代の寺院が存在した可能性が高く、今後の調査の成果が期待される[7]。

（木野本和之）

＜註＞

1　かつては祓川が本流であったが、永保２(1082)年の地震・暴風雨によって現河道へ移行したものと考えられている。なお、櫛田町・清水町間には櫛田川の旧流路痕跡に沿った畦畔が存在し、かつての乱流の様子がしのばれる。しかし、今回のほ場整備事業によってこれも消滅した。

2　宇河雅之・袖岡直樹『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・柳辻遺跡・大蓮寺遺跡・北ノ垣内遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1996年。

3　すぐ南の豊原町地内には、琵琶垣内遺跡（旧称閑浄寺遺跡）がある。昭和62年に県道改良工事に伴う発掘調査が一部実施された。来年度もほ場整備事業に伴う調査が予定されており、今後の調査結果によっては、当遺跡群の範囲も変更される可能性がある。

4　註２文献に同じ。

5　『松阪市史』第２巻史料篇考古、松阪市、1978年。

6　註５文献に同じ。

7　塔ノ本地区に隣接する字に大蓮寺がある。地元の方のご教示では、これを「だいらいじ」と読むそうである。付近には、「鐘付田」「社」「社別當」「堂ノ後」などの字名がある。これらを総合すると、塔ノ本地区周辺に大雷寺廃寺が存在する可能性が非常に高くなった。今後、塔ノ本地区については、ほ場整備事業及び県道改良工事に伴う調査が実施される予定である。

Ⅲ．池ノ端地区

池ノ端地区は松阪市櫛田町字池ノ端に所在し、近鉄櫛田駅北方に拡がる広大な水田地帯の一角、櫛田集落北東辺に位置する。櫛田川によって形成された自然堤防上に立地し、現状は水田及び畑である。西側は奥ノ垣内地区と接し、集落を隔てて南西にはかん志ゆう地区がある。今回の調査対象は、遺跡範囲東端のほ場整備事業に伴い保存が困難な道路部分（210㎡）である。調査は、平成８年10月22日に開始し、同年10月25日に終了した。最終的な調査面積は200㎡である。

１　遺　　構

⑴　基本的層序

遺跡範囲の大半は、櫛田川によって形成された自然堤防上にある。調査区は自然堤防から一段下がった水田部分で、上段の畑部分との比高差約１ｍである。東側は低湿地もしくは旧河道であったと考えられ、遺構検出面は東方向に緩やかに傾斜する。

調査区西壁の基本的な土層は、第１層：褐色土（耕作土）、第２層：灰褐色土（遺物包含層）、第３層：黄褐色土（地山）となり、第３層上面を遺構検出面とした。

⑵　遺構

今回の調査で確認した遺構は、大きくは室町時代と江戸時代に分けられる。ここでは、確認された主な遺構について述べる。なお、検出遺構の概略については遺構一覧表（第３表）を参照されたい。

ａ　室町時代の遺構

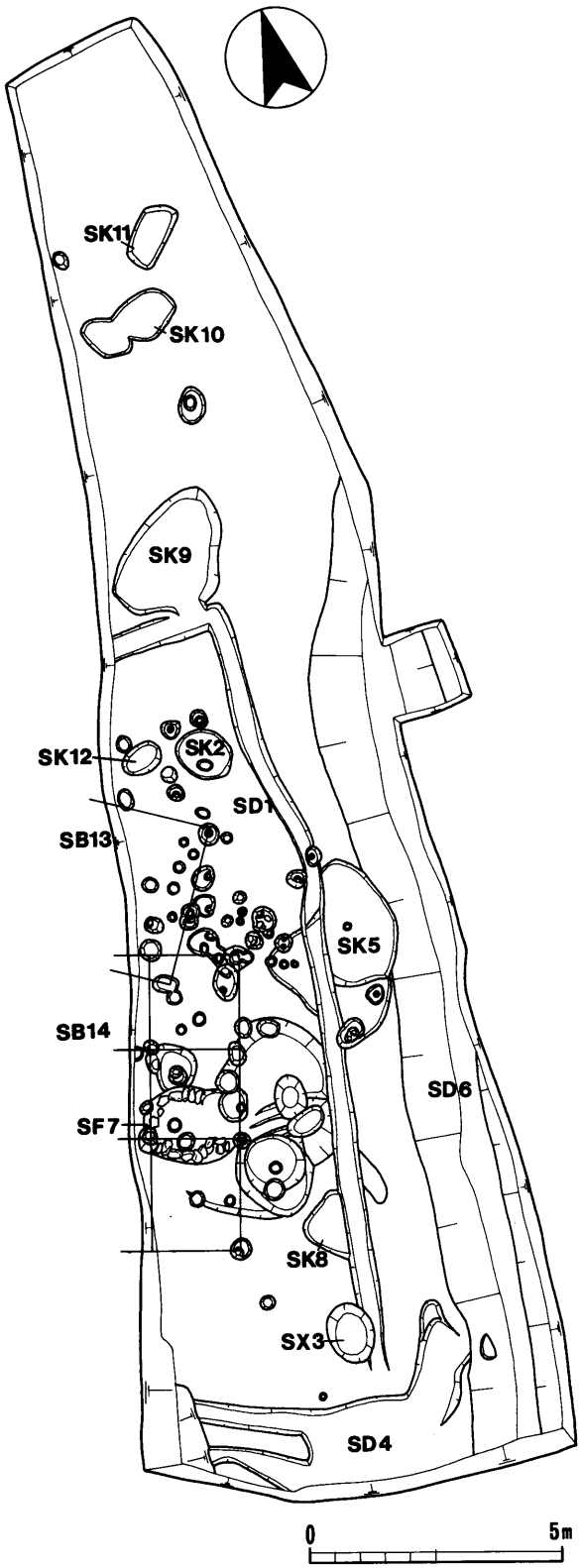
この時期の遺構には、溝・土坑・土坑墓・竈がある。

土坑墓ＳＸ３　　調査区南よりで検出した。褐色系土を基本埋土とする。長径1.2m、短径0.9m、検出面からの深さ0.4mで、平面形は楕円形を呈する。底部からは、土師器茶釜が１個体と鍋２個体が潰れた状態で出土している。人骨は確認できなかったが、出土状況から見て土坑墓と考えられる。

溝ＳＤ４　　調査区南端で検出した。褐色系土を基本埋土とする。大きく削平されており、検出面から一番深いところで0.1mである。西側では２条に分かれる。埋土から、土師器鍋・皿、陶器の破片が出土している。

溝ＳＤ６　　調査区東側で検出した。黄褐色系粘質土が基本埋土で地山との区別が難しかった。溝の東肩は調査区外にあり、幅の確認のためトレンチを１ヵ所入れた。トレンチ部分で確認された幅は2.5ｍ、検出面からの深さ0.8mである。断面は薬研堀状で、南側には溝浚えの痕跡が確認できた。埋土中には15世紀末～16世紀初頭の鍋・茶釜・十能等の土師器煮沸具、皿が大量に投棄されていた。溝は土砂の堆積によって徐々に浅くなり、近世には完全に埋没している。溝の軸は、ほぼ南北方向である。南側の内肩を延長すると、ほぼ現櫛田集落の東端のラインと一致する。現在、この部分には南北方向の細長い水田が存在することから、この溝は集落と周辺の水田とを区画するものである可能性がある。

竈ＳＦ７　　調査区南寄りの西壁際で検出した。東西約1.8m、南北約1.5mの半地下式の竈で、西に竈本体、東に作業場と思われる前庭部がある。本体部分は東向きに開口しており、基部の石列内には木炭混じりの焼土が詰まっていた。また、本体西側は廃絶後のピットによって破壊されている。開口部両脇の石列は袖状を呈するが、右袖は本体同様に廃絶後のピットによって破壊されている。前庭部は東西約２ｍ、南北約３ｍの土坑状を呈するが、廃絶後のピットによって破壊されている。南寄りの土坑埋土には木炭・灰が多量に混入している。竈に用いた薪



第５図　遺構平面図 1:150

の炭・灰を掻き出し、廃棄したものであろう。出土遺物は少ないが、埋土中から青磁椀が出土した。その他の遺物は土師器皿・鍋等の破片が多いが、15世紀末～16世紀初頭を中心とする時期のものであろう。なお、本体埋土を中心に人頭大の石が十数個確認されており、竈本体に使用されていた石が廃絶後に投棄された可能性がある。なお、これに類似した遺構が美杉村多気遺跡群上村地区においても確認されている[1]。

土坑ＳＫ11　調査区北端近くで検出した。長径1.3m、短径0.7m、検出面からの深さは0.1mと浅い。平面形は隅丸方形状を呈する。埋土からは16世紀初頭の土師器鍋・皿が出土している。

ｂ　江戸時代の遺構

溝ＳＤ１　調査区南半部のほぼ中央を南北に縦断する形で検出した。北端部で西向きほぼ直角に屈曲しＳＫ９を切る。幅約0.4m、深さ約0.2mで、断面形は逆台形状を呈する。今回検出されたピット群はこの溝に囲まれた部分に集中しており、ＳＤ１は区画溝として機能していたものと考えられる。溝埋土からは、近世の甕・椀等の陶器類、焙烙・茶釜・皿等の土師器類が出土している。

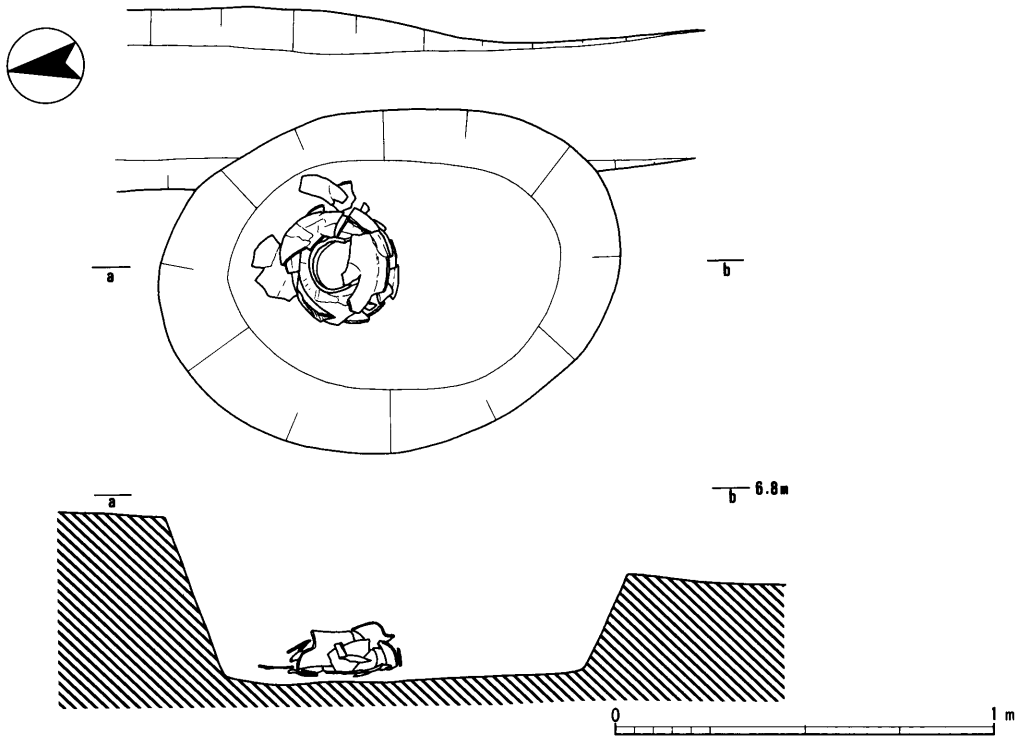
ｃ　時期不明の遺構

掘立柱建物ＳＢ14　調査区南側西寄りで検出した。東西２間（約2.2m）以上、南北３間（約5.7m）の総柱建物であると推定される。西部は調査区外に広がる。柱間は東西方向が約1.95m、南北方向が約2.1mである。ピットから出土した遺物はほとんどなく正確な時期は特定できないが、ピットがＳＦ７を破壊していることから、建物の時期は近世と思われる。

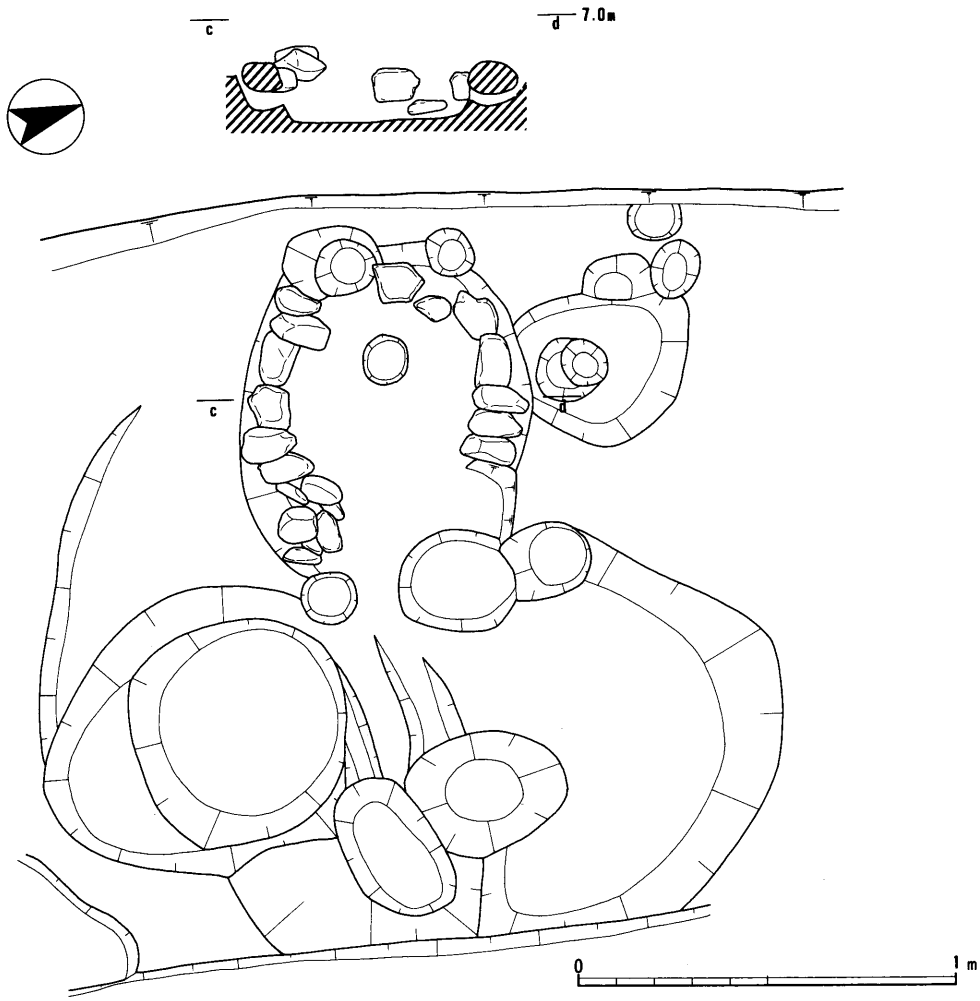
掘立柱建物ＳＢ13　調査区中央西寄りで検出した。東西２間（約２ｍ）以上、南北２間（約3.6m）であると推定される。西部は調査区外に広がる。柱間は東西方向、南北方向ともに約1.8mである。ＳＢ14同様にピットから出土した遺物はほとんどなく正確な時期は特定できないが、建物の時期は近世と思われる。

＜註＞

1　越賀弘幸・伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告Ⅱ』、三重県埋蔵文化財センター、1996年。



第６図　土坑墓ＳＸ３遺物出土状況図 1:20



第７図　竈ＳＦ７実測図 1:20

遺　　構	時　期	特徴・形状・計測数値など
溝　ＳＤ１	江　戸	幅約0.4m、深さ約0.2m、延長16m
土　坑ＳＫ２	室　町	長径1.1m、短径0.9m、深さ0.1m
土坑墓ＳＸ３	室　町	長径1.2m、短径0.9m、深さ0.4m
溝　ＳＤ４	室　町	幅1.5m以上ごく浅い西側は２条となる
土　坑ＳＫ５	室　町	長径2.6m、短径1.6m、深さ0.1m ＳＤ１、ＳＤ６に切られる
溝　ＳＤ６	室　町	幅2.5m、深さ0.8m、確認延長20m
竈　ＳＦ７	室　町	東西1.8m、南北1.5m半地下式の石組み
土　坑ＳＫ８	不　明	長径1.2mＳＤ１に切られる
土　坑ＳＫ９	室　町	長径2.7m、短径1.9m、深さ0.1m ＳＤ１に切られる
土　坑ＳＫ10	室　町	長径1.0m、短径0.8m焼土あり
土　坑ＳＫ11	室　町	長径1.3m、短径0.7m、深さ0.1m
掘立柱建物ＳＢ12	江　戸　？	東西２間(2.2m）以上、南北３間(5.7m）の総柱
掘立柱建物ＳＢ13	江　戸　？	東西２間(２m）以上、南北３間(3.6m)

第３表　遺構一覧表

2　遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱に換算して27箱である。以下、それぞれの遺物についての概要を記す。遺物の詳細は、遺物観察表（第４表～第６表）を参照されたい。

a　室町時代の遺物

１～69は、ＳＤ６から出土した。この時代の遺物の大半は、ほとんどが南伊勢系土師器である[1]。

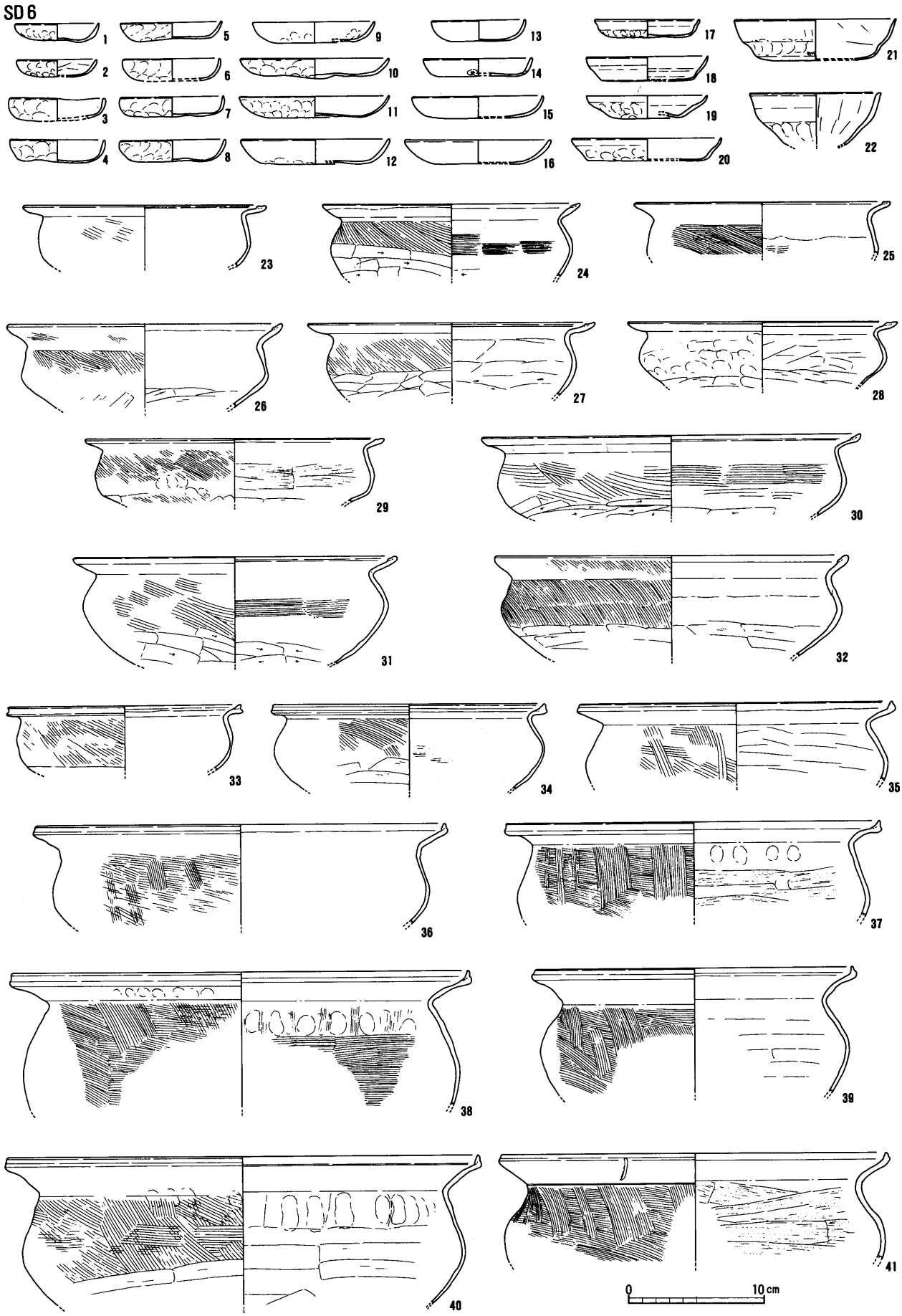
１～21は土師器皿である。これらは、後述する鍋・茶釜と共にＳＤ６から出土した。南伊勢系土師器皿の分類によるＢ・Ｃ・Ｄ系統に相当するものであろう。口径は最小5.7cm、最大11.7cmである。口径値で、６cm前後、７cm～9.5cm、10cm～12cmの３群に大まかに分類することができる。なお、14は焼成後穿孔が１ヶ所認められ、口縁の一部には油煙が付着する。おそらく灯明皿として使用されていたものであろう。

22は土師器椀である。口縁部～体部の破片が出土しているが、高台がつくものであろう。同様の器種は多気遺跡群上村地区での出土例がある[2]。

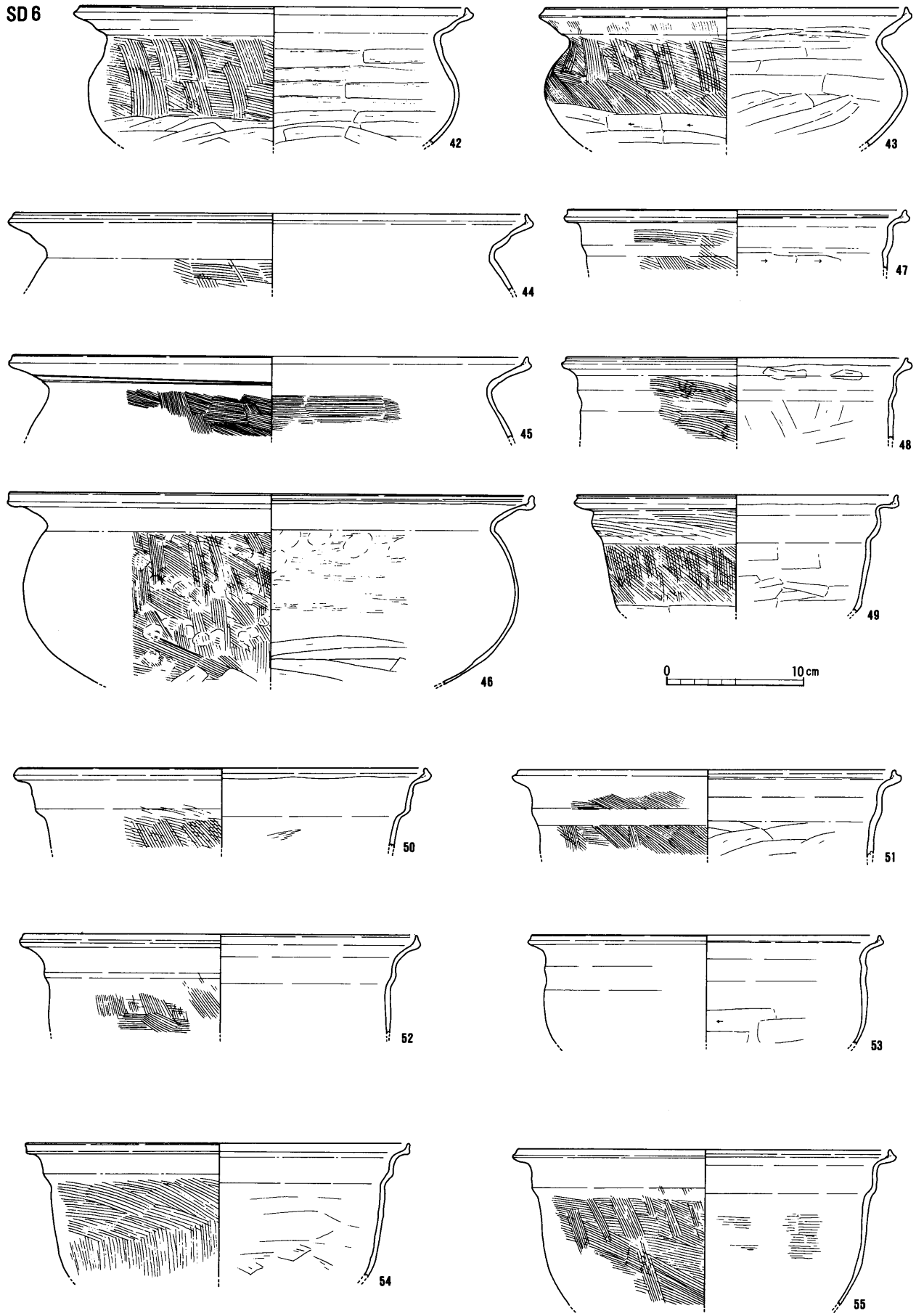
23～55は土師器鍋である。23～32は南伊勢系の小型鍋（鍋Ａ）である。口縁部折り返し部分に施されるヨコナデが強く、その部分が浅く窪んでいる。口径はほぼ20cm前後のものが多いが、32のように30cmのものもある。33～46は中型鍋（鍋Ｂ１）である。口縁部の折り返し部分の幅が狭くなり、その断面形は鋭利な三角形状である。また、体部から口縁部にかけて「くの字」状に屈曲し頸部はほとんど確認できない。南伊勢系煮沸用土器編年の第４段階ｃ型式に相当する。48～55は半球形体部の鍋（鍋Ｃ）である。体部外面および口縁部には多量の煤が付着している。これらも前述の鍋Ｂ１と同様の口縁部の形態を持ち、南伊勢系煮沸用土器編年の第４段階ｃ型式に相当する。その他、出土量は少ないが羽釜形、茶釜形の土師器がある（56～61）。なお、58は茶釜蓋である。欠落しているが、中心部分には薄い半円形のつまみが付く。61は口縁部の折り返し部分にヨコナデが施され、口縁端部は内弯する。口縁部は羽釜形、頸部から体部にかけては茶釜形の形状に酷似している。体部の形状が不明で詳細を語ることは出来ないが、一応は茶釜形甕としておく。今後の類例の増加を待ちたい。その他小片のため図示できなかったが、把手付小形鍋・十能形も出土している。

ＳＤ６からは、上記の南伊勢系土師器の他に少量ではあるが陶器類も出土している。いずれも瀬戸産と思われる（62～67）。64は灯明皿。66は小椀である。使用目的等は不明であるが、口縁部及び高台に明らかに意図的なミガキ・ケズリの２次加工がされている。

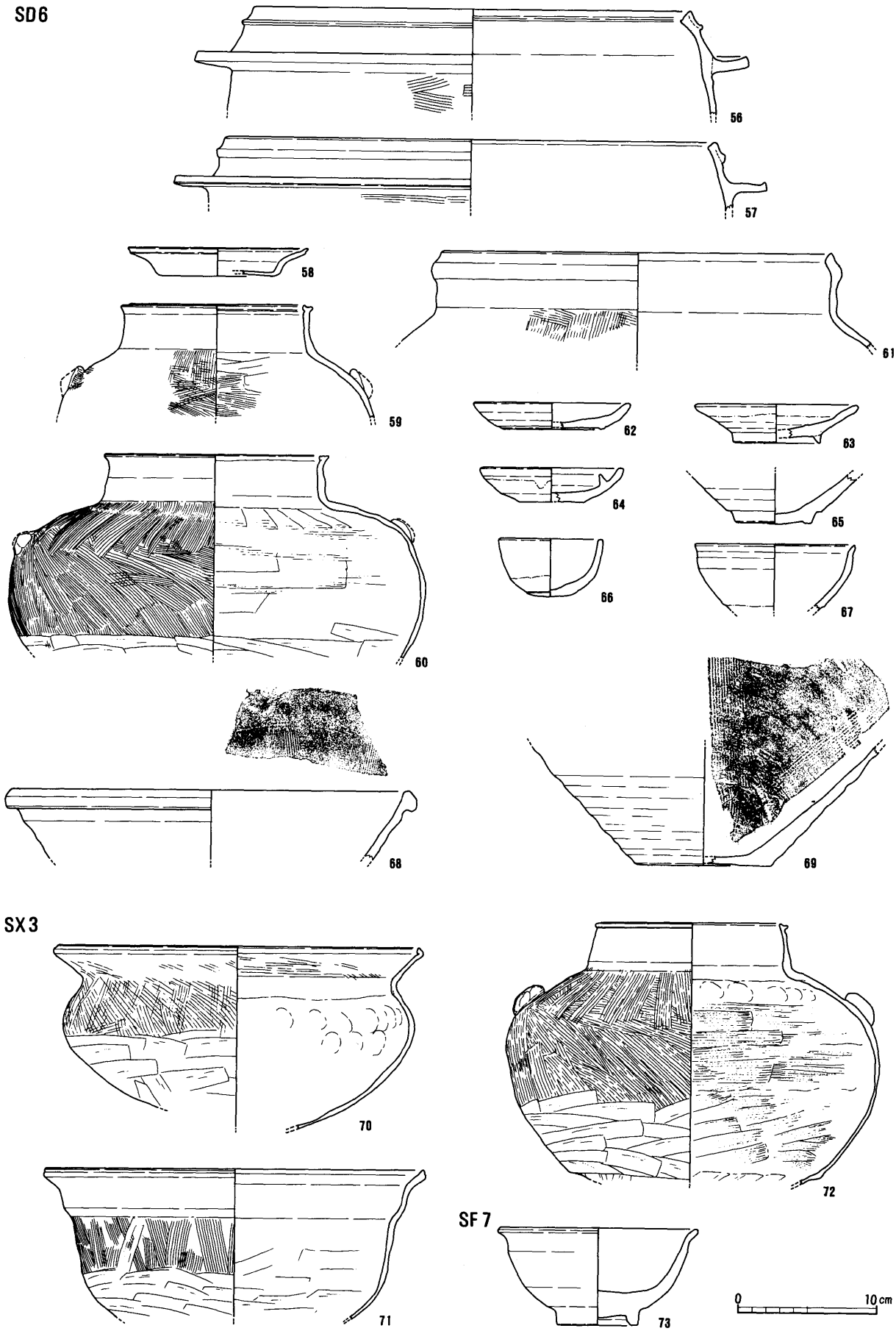
これらＳＤ６から出土した土器は、いずれも概ね15世紀末～16世紀初頭のものである。



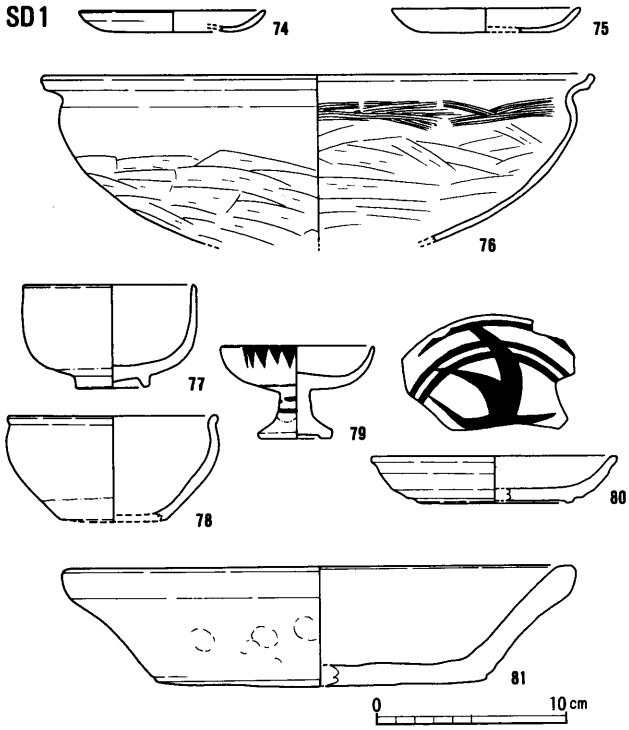
第８図　出土遺物実測図（1）　1:4



第9図　出土遺物実測図(2)　1:4



第10図　出土遺物実測図（3）　1:4



第11図　出土遺物実測図（4）　1:4

70～72はＳＸ３から出土した。72は蔵骨器、70はその蓋として利用されていた。71は、その下から出土している。これらの土器も伊藤編年第４段階ｃ型式に相当し、ＳＤ６出土の土器と同時期のものである。

73は青磁椀。ＳＦ７埋土から出土した。ＳＦ７からこの椀以外に目立った遺物の出土はなかった。その特徴からみて中国からの輸入陶磁であろう。

ｂ　江戸時代の遺物

ＳＤ１からは、74～81のような近世の遺物がまとまって出土した。ここに図示したものは、概ね17世紀前半のものである。76の中形鍋（鍋Ｂ１）は器形が偏平になり、ほとんど焙烙形にちかい。78は天目茶碗、79は仏飯具、80は鉄絵皿である。

その他、検出中に出土した主な遺物を82～93に図示した。84は土師器茶釜形か。その大きさ、器形から土瓶形の可能性もある。その他は、近世遺物が中心であるが、中世のものも若干含まれる。

＜註＞

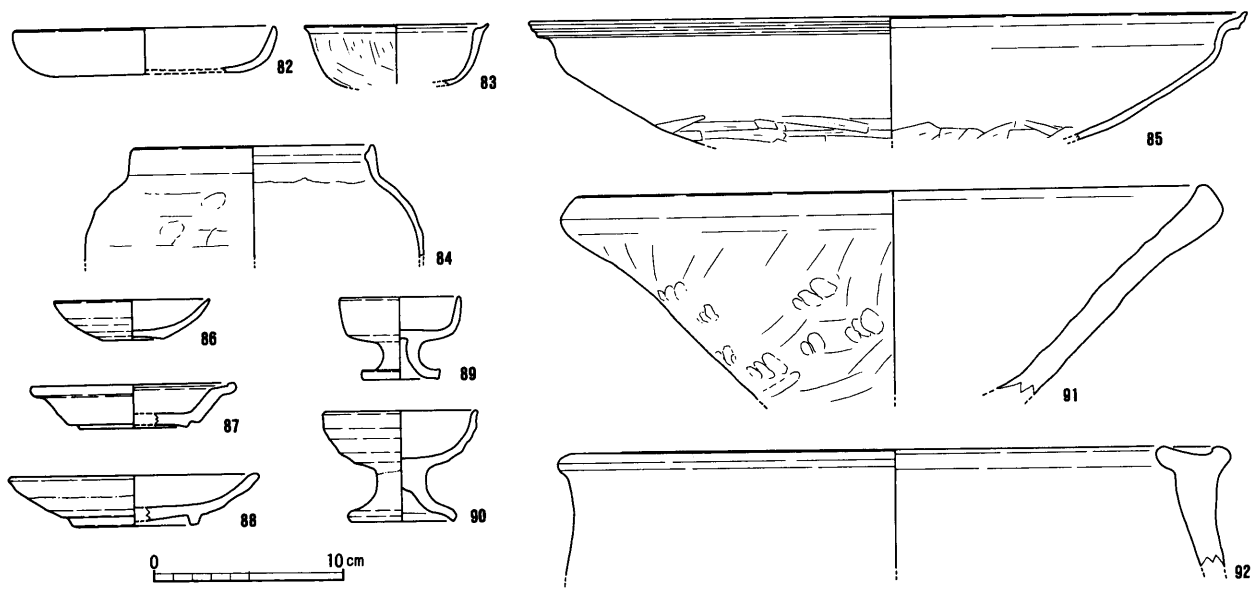
1　南伊勢系土師器の器種・編年等については、伊藤裕偉氏の下記著作を参考にし、本稿で使用する用語もそれに準じている。

「南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory』vol.1 三重歴史文化研究会、1990年。

「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、1996年。

『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1996年。

2　越賀弘幸・伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告II』、三重県埋蔵文化財センター、1996年。



第12図　出土遺物実測図（5）　検出中　1:4

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	026－03	土師器 皿	SD6	SZ6	口：6.0 高：1.3	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	1/2	ゆがみ大
2	027－02	土師器 皿	SD6	SZ6	口：5.7	外：ナデ、オサエ 内：ナデ（工具アタリ痕あり）	やや密	並	にぶい橙	1/2	ゆがみ大
3	010－07	土師器 皿	SD6	SZ6	口：7.0	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	1/2	大きく歪む
4	010－02	土師器 皿	SD6	SZ6	口：7.0 高：1.6	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	密	良	淡橙	ほぼ完存	
5	010－01	土師器 皿	SD6	SZ6	口：7.5 高：1.3	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	密	良	浅黄橙	7/8	
6	010－06	土師器 皿	SD6	SZ6	口：7.1 高：1.5	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	密	良	淡橙	2/5	
7	010－05	土師器 皿	SD6	SZ6	口：7.5 高：1.5	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	密	良	灰白	2/5	
8	010－03	土師器 皿	SD6	SZ6	口：7.6 高：1.6	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	やや密	良	淡橙	ほぼ完存	
9	009－06	土師器 皿	SD6	SZ6	口：約9 高：1.5	外：ナデ、オサエ 内：ナデ、オサエ	やや粗	並	にぶい橙	1/7強	
10	010－08	土師器 皿	SD6	SZ6	口：約11 高：1.5	外：ナデ、オサエ 内：ナデ、オサエ	密	良	灰白	1/6	
11	010－10	土師器 皿	SD6	SZ6	口：11.0 高：1.6	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	やや密	良	灰白	2/5	
12	010－09	土師器 皿	SD6	SZ6	口：11.0 高：1.85	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	密	良	浅黄橙	2/5	
13	026－06	土師器 皿	SD6	SZ6	口：6.7 高：1.5	外：ナデ、オサエ 内：ナデ、オサエ	密	並	にぶい橙	1/4弱	
14	010－04	土師器 皿	SD6	SZ6	口：8.0 高：1.6	外：ヨコナデ、ナデ、オサエ 内：ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙 褐灰	1/7	焼成後穿孔1個 一部油煙付着
15	026－05	土師器 皿	SD6	SZ6	口：9.4 高：1.6	外：ナデ 内：ナデ	やや密	並	灰白	1/4	
16	026－07	土師器 皿	SD6	SZ6	口：10.5 高：1.8	外：ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	1/4	
17	026－04	土師器 皿	SD6	SZ6	口：7.6 高：1.3	外：ヨコナデ、オサエ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	密	並	浅黄橙	1/6	
18	027－03	土師器 皿	SD6	SZ6	口：8.7 高：1.8	外：ナデ 内：ヨコナデ	密	並	灰白 浅黄橙	1/4	
19	009－05	土師器 皿	SD6	SZ6	口：9.0 高：1.7	外：ナデ、オサエ 内：ヨコナデ	やや粗	やや不良	浅黄橙	1/4	
20	027－01	土師器 皿	SD6	SZ6	口：10.7 高：1.7	外：オサエ、ナデ 内：ヨコナデ	密	並	浅黄橙	1/2弱	
21	027－04	土師器 皿	SD6	SZ6	口：11.7 高：3.0	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	灰白	1/8	ゆがみ大
22	026－02	土師器 椀	SD6	SZ6	口：9.5	外：オサエ、ヨコナデ 内：ナデ	やや密	並	にぶい橙	2/5	
23	024－04	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：17.8	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	やや粗	並	灰白	1/8	
24	023－04	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：18.7	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ハケメ、工具によるナデ	やや粗	並	灰白	1/7	
25	024－03	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：18.7	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、粘土接合痕	やや粗	並	灰白	1/4弱	
26	015－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：20.1	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ケズリ	やや密	並	にぶい褐	1/5	外面に煤付着
27	005－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：約20	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ケズリ	やや密	並	灰白	1/5	
28	025－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：19.5	外：ヨコナデ、オサエ、ナデ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	密	並	明褐灰	1/4	
29	015－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：約22	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、板ナデ、ケズリ	密	並	淡黄	1/4	
30	023－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：27.3	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや粗	並	浅黄橙	1/8	
31	023－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：23.5	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや粗	並	にぶい橙	1/6	
32	020－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：30.0	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ケズリ	やや密	並	にぶい黄褐 にぶい橙	1/8	
33	015－03	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：17.0	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ	やや密	並	灰白	1/7	

第4表　出土遺物観察表（1）

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
34	011－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：19.8	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ	密	並	灰白 浅黄橙	1/8	
35	025－03	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：22.7	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密	並	灰白	1/7	外面に煤付着
36	014－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：約30	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密	並	にぶい褐	1/8	外面に煤付着
37	019－03	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：約28	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、オサエ、工具によるナデ	やや密	並	浅黄橙 灰黄褐	1/8	外面に煤付着
38	019－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：約34	外：ヨコナデ、オサエ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、オサエ、工具によるナデ	やや密	並	灰白	1/4	外面に煤付着
39	020－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：約34	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、工具によるナデ	やや密	並	にぶい褐 にぶい黄褐	1/8	外面に煤付着
40	014－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：34.7	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、オサエ、工具によるナデ、ケズリ	やや密	並	にぶい橙	1/5	外面に煤付着
41	018－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：約29	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、工具によるナデ	やや密	並	にぶい黄褐	1/8	外面に煤付着
42	021－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：約28	外：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、工具によるナデ、ヘラケズリ	やや密	並	にぶい黄褐	1/6	外面に煤付着
43	018－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：26.5	外：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ、工具によるナデ	密	並	にぶい黄褐 灰黄褐	1/4	外面に煤付着
44	022－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：37.0	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	浅黄橙	1/6	
45	022－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：37.2	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	灰白	1/8	
46	011－03	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：37.8	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	密	並	浅黄橙 褐灰	1/6	外面に指圧痕
47	023－03	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：24.5	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ケズリ	やや粗	並	灰白	口：わずか	外面に煤付着
48	025－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：24.5	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ケズリ、ナデ	やや密	並	灰白 明褐灰	1/4	
49	028－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：23.3	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ	密	並	灰白 浅黄橙	5/6	外面に煤付着
50	017－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：29.7	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、工具によるナデ	密	並	浅黄橙	1/7	外面に煤付着
51	022－03	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：27.3	外：ヨコナデ、ハケメ、ナデ 内：ヨコナデ、ケズリ	やや粗	並	灰白	1/6	外面に煤付着
52	016－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：28.6	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	密	並	浅黄橙	1/4	外面に煤付着
53	024－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：25.3	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ケズリ	やや粗	並	にぶい橙	口：わずか	外面に煤付着
54	021－02	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：28.0	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、工具によるナデ、ケズリ	やや密	並	にぶい黄橙	1/8	外面に煤付着
55	016－01	土師器 鍋	SD6	SZ6	口：27.4	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、工具によるケズリ	密	並	浅黄橙	1/5	外面に煤付着
56	005－01	土師器 羽釜	SD6	SZ6	口：31.0	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白 灰黄褐	1/8	
57	017－02	土師器 羽釜	SD6	SZ6	口：約35	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密	並	灰白	1/12	
58	015－04	土師器 茶釜蓋	SD6	SZ6	口：12.8 底：7.9 高：2.05	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	密	並	浅黄橙	1/3	
59	011－01	土師器 茶釜	SD6	SZ6	口：12.5	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	密	並	にぶい橙	1/6	外面に煤付着
60	028－02	土師器 茶釜	SD6	SZ6	口：15.9 体：29.9	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	やや密	並	浅黄橙 橙	口：完存 体：2/3	
61	019－01	土師器 茶釜型甕	SD6	SZ6	口：約28	外：ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、工具によるナデ	やや密	並	浅黄橙	1/8	
62	006－08	陶器 皿	SD6	SZ6	口：11.0 底：7.0 高：1.9	外・内：施釉 底：削り出し高台	密	並	灰白	1/5	
63	007－06	陶器 皿	SD6	SZ6	口：11.4 底：6.2 高：2.8	外：ケズリ、ナデ、ロクロケズリ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	やや粗	並	灰白	口：1/6 底：3/8	
64	006－10	陶器 灯明皿	SD6	SZ6	口：9.7 底：4.7 高：2.5	外：鉄釉 内：鉄釉（2度がけ）	密	良	にぶい赤褐 灰白、マーブル	口：1/5 底：1/4	
65	026－01	陶器 椀	SD6	SZ6	底：5.3	外：ロクロケズリ 底：削り出し高台 内：施釉	密	良	灰白 浅黄	底：1/2	
66	006－06	陶器 椀	SD6	SZ6	口：7.5 高：4.1	外・内：鉄釉　口縁部、底部に2次加工（ミガキ、ケズリ）	やや密	並	灰白　褐 暗褐	ほぼ完存	

第5表　出土遺物観察表（2）

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
67	006－01	陶器 椀	SD6	SZ6	口：11.3	外：鉄釉（2度がけ） 内：鉄釉（2度がけ）	密	良	にぶい赤褐 赤褐	1/4	天目茶椀
68	005－05	陶器 擂鉢	SD6	SZ6	口：約28	外：鉄釉 内：鉄釉（擂り目）	やや密	並	暗赤褐	1/7	
69	024－01	陶器 擂鉢	SD6	SZ6	底：9.4	外：ロクロナデ 底：糸切り痕 内：ロクロナデ（擂り目）	やや密	並	灰白 暗紫灰	1/4	
70	012－01	土師器 鍋	SX3	SK3	口：25.9	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、オサエ、ケズリ	やや密	並	浅黄橙	ほぼ完存	外面に煤付着
71	001－01	土師器 鍋	SX3	SK3	口：約27	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ、ケズリ、ユビオサエ	やや密	並	明灰褐	ほぼ完存	内外面に煤付着
72	013－01	土師器 茶釜	SX3	SK3	口：12.7 体：26.8	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ	密	良	灰白	口：ほぼ完存 体：1/2	外面に煤付着
73	008－02	磁器椀	SF7	SK7	口：14 底：4.8 高：7.0	外：施釉、削り出し高台 内：施釉	やや密	良	オリーブ灰	口：1/12 底：1/6	青磁 輸入陶磁
74	008－03	土師器 皿	SD1	SD1	口：10.0 高：1.1	外：ナデ 内：ナデ	粗	やや不良	橙	1/4	口縁部に油煙付着
75	009－02	土師器 皿	SD1	SD1	口：10.0 高：1.3	外：ナデ 内：ナデ	粗	やや不良	浅黄橙	1/4	
76	001－02	土師器 鍋	SD1	SD1	口：約29	外：ヨコナデ、ケズリ 内：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ、ナデ	やや密	並	にぶい橙	口：ほぼ完存	内外面に煤付着
77	007－03	陶器椀	SD1	SD1	口：8.9 高：5.45	外：施釉、ロクロナデ、ロクロケズリ 内：施釉	やや密	良	にぶい赤褐	1/2	
78	007－04	陶器椀	SD1	SD1	口：約11	外：施釉、ロクロナデ、ロクロケズリ 内：施釉	やや粗	良	灰白 黒	1/4	天目茶椀
79	007－02	陶器 仏飯具	SD1	SD1	口：8.0 底：3.7 高：4.9	外：施釉、ロクロナデ、ロクロケズリ 内：施釉	密	良	にぶい橙 明緑灰	口：1/11 脚：完形	
80	008－01	陶器 皿	SD1	SD1	口：12.8 高：2.5	外：施釉、削り出し高台 内：施釉、染付	密	良	灰白	口：1/4 底：3/8	鉄絵皿
81	003－01	陶器 練鉢	SD1	SD1	口：26.6 底：17.3 高：6.3	外：ナデ 内：ヨコナデ、ナデ 底：未調整	粗	並	浅黄橙 にぶい橙	口：1/4 底：1/4	
82	006－07	土師器 皿	検出	検出	口：13.6 高：2.4	外：ナデ 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙	1/3	
83	005－04	土師器 椀	検出	検出	口：9.5	外：ヨコナデ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ	密	並	灰白 浅黄橙	1/4	
84	005－03	土師器 茶釜か 土瓶	検出	検出	口：12.5	外：ヨコナデ、ナデ、オサエ 内：ヨコナデ、ナデ、粘土接合痕	やや密	並	にぶい橙	1/6	外面に煤付着
85	003－03	土師器 焙烙	検出	検出	口：37.8	外：ヨコナデ、ナデ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	やや密	並	にぶい褐 褐灰	1/6	内面に炭化物付着
86	007－07	陶器 皿	検出	検出	口：8.3 高：2.1	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：施釉	やや密	並	灰 浅黄	1/2	
87	006－02	陶器 皿	検出	検出	口：10.2 底：5.7 高：2.3	外：ロクロナデ、ロクロケズリ削り出し高台 内：施釉ロクロナデ、	やや密	並	灰白	1/6	
88	006－03	陶器 皿	検出	検出	口：12.6 底：6.5 高：2.7	外：施釉、ロクロケズリ、削り出し高台ナデ、ヘラギリ 内：施釉、ロクロナデ	密	良	灰白	小片	磨滅のため調整不明瞭
89	006－05	陶器 仏飯具	検出	検出	口：6.2 底：2.0 高：4.3	外：施釉、ヨコナデ、ナデ 内：施釉	密	良	灰白 オリーブ灰	口：わずか 底：完形	
90	007－01	陶器 仏飯具	検出	検出	口：8.0 底：5.4 高：5.85	外：施釉、ロクロナデ、ケズリ 内：施釉	やや密	良	灰白	口：3/8 底：完形	
91	002－01	陶器 練鉢	検出	検出	口：約32	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	やや密	並	褐灰	1/4	
92	004－01	陶器 甕	検出	検出	口：28.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ユビオサエ	やや密	並	赤橙	1/8	

第6表　出土遺物観察表（3）

3　結　　語

(1)　遺構について

最後に調査のまとめとして、池ノ端地区の調査によって得られたこと、そこから提起される問題点について若干の考察を行いたい。

a　中世末～近世の溝

ＳＤ６は、調査区東端を南北に走る溝で、現櫛田西垣内集落の東端ラインとほぼ一致する。調査前の状況では、ちょうどＳＤ６の位置には農業用水溝が

走っており、調査区の南にはＳＤ６とつながるように細長い地割りが存在する。このことから、ＳＤ６は西垣内集落東辺を区画する溝であった可能性が考えられる。ＳＤ１はその南端部は不明瞭だが、ほぼＳＤ６と平行する関係にあり、北端部でほぼ直角に西へ屈曲する。また、ＳＤ１に囲まれた部分には多数のピットが集中する傾向が見られ、その範囲では掘立柱建物が確認された。明治19年作成の櫛田村の地図には調査区西側の一段高まった畑に家屋の表示があり、現在も19世紀の常滑産井戸枠専用土器を使用した井戸が残されている[1]。したがって、ＳＤ１によって区画された部分はかつての屋敷地に相当するものであると考えられる。なお、微高地を挟んで西側の奥ノ垣内地区でも同時期の遺構・遺物が確認されており、これらの発掘結果から、中世～近世の櫛田集落の中心部は現集落とほぼ重なっているものと考えるのが妥当である。

b　竈について

ＳＦ７は、煮炊き用の石組み竈であろう。石組の内部に木炭混じりの焼土が詰まり、前庭部南側には掻きだした炭・灰を投棄する目的で掘られたと考えられる土坑がある。ＳＦ７は、規模の違いはあるが平成７年度調査の一志郡美杉村多気遺跡群上村地区で確認されているＳＦ２の構造に類似している。この時期の竈の県内での確認例は少なく、前述の上村地区のほか同遺跡群土井沖地区[2]、員弁郡東員町の山田城跡[3]、名張市赤目町の壇・柏原遺跡[4]などで確認されている土坑がその類例として挙げられる程度である。

ＳＦ７は、竈本体部分に集中して出土した礫群が上部に組まれていた石組みである可能性がある。しかし、上村地区ＳＦ２同様にその構造については不明な点があり多くを語れない。今後の調査活動による事例の増加を期待したい。

c　土坑墓

ＳＸ３からは煮沸用の土師器が３個体出土している。その出土状況から茶釜を蔵骨器、倒立状態にあった鍋Ｂをその蓋であると判断した。

しかし、ここで考えておきたいのは、それらの下部からもう１個体分の鍋Ｃが出土していることである。通常では蔵骨器と蓋で１セットとして考える。では、その下の鍋Ｃは何の為に置かれたのか。出土状況から別の蔵骨器とは考えがたい。また、鍋Ｃを復元したところ口縁部と体部はほぼ完存するが、底部については該当する破片がほとんど見当たらず底抜け状態であった。このような状況から、鍋Ｃが蔵骨器の台として使用されたのではないかと考えた。他に類例がなく断言はできない。これは、あくまでもひとつの仮説として考えておきたい。今後の調査活動による事例の増加を期待する。

(2)　遺物について

ＳＤ６から南伊勢系土師器が大量に出土した。前述のように、破片も含めれば鍋Ａ・Ｂ１・Ｃ、把手付小型鍋、十能形、羽釜形、茶釜形など15世紀末～16世紀初頭の煮沸用土器に関してはほぼ全器種が出土している。残念ながらＳＤ６東半部は調査対象外で、一部幅確認の為にトレンチを入れた以外は掘削できなかった。東壁断面には、包含されている大量の遺物が観察された。もし全掘できれば、この時期の土器を研究する上でまとまった好資料となったであろう。

以上、池ノ端地区の調査によって得られたこと、そこから提起される問題点について若干の考察を行ってきた。今回の調査の成果は、隣接する奥ノ垣内地区の調査も合わせ、これまで不明であった櫛田地区の中世末～近世の集落域の実態に迫る手がかりを得ることができたところにある。しかし、今回の調査区は集落跡の縁辺部にあたるため、その実態はもう少し複雑であると考えられる。調査面積200㎡という限られた条件の中でこれだけの成果を上げることができたところに、櫛田地区の重要性が認識されよう。　（木野本和之）

＜註＞

1　「松阪地図集成」『松阪市史』別巻１、松阪市1983年。

2　伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1993年。

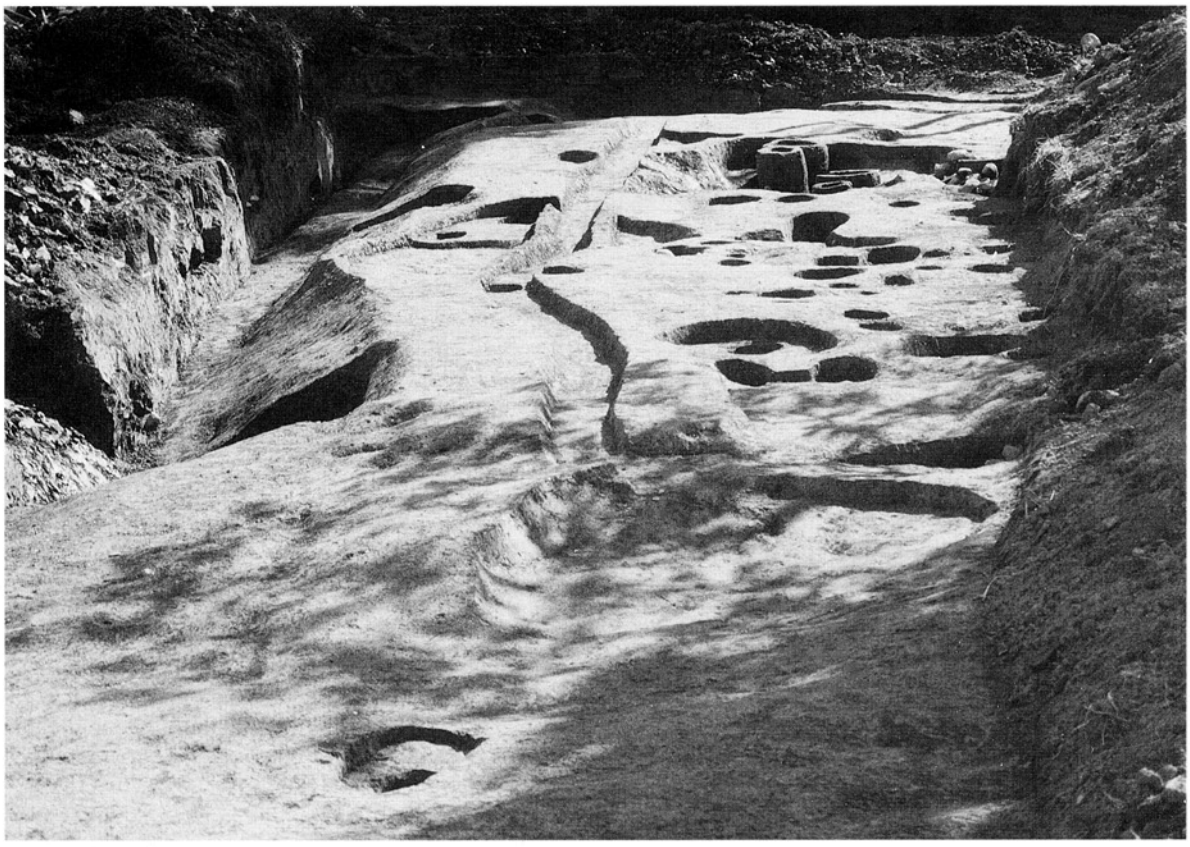
3　久志本鉄也『山田城跡発掘調査報告』、東員町教育委員会、1984年。

4　田阪仁「壇・柏原遺跡」『昭和58年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1984年。

作業風景（西から）

ＳＸ３実測風景（西から）

図版 2



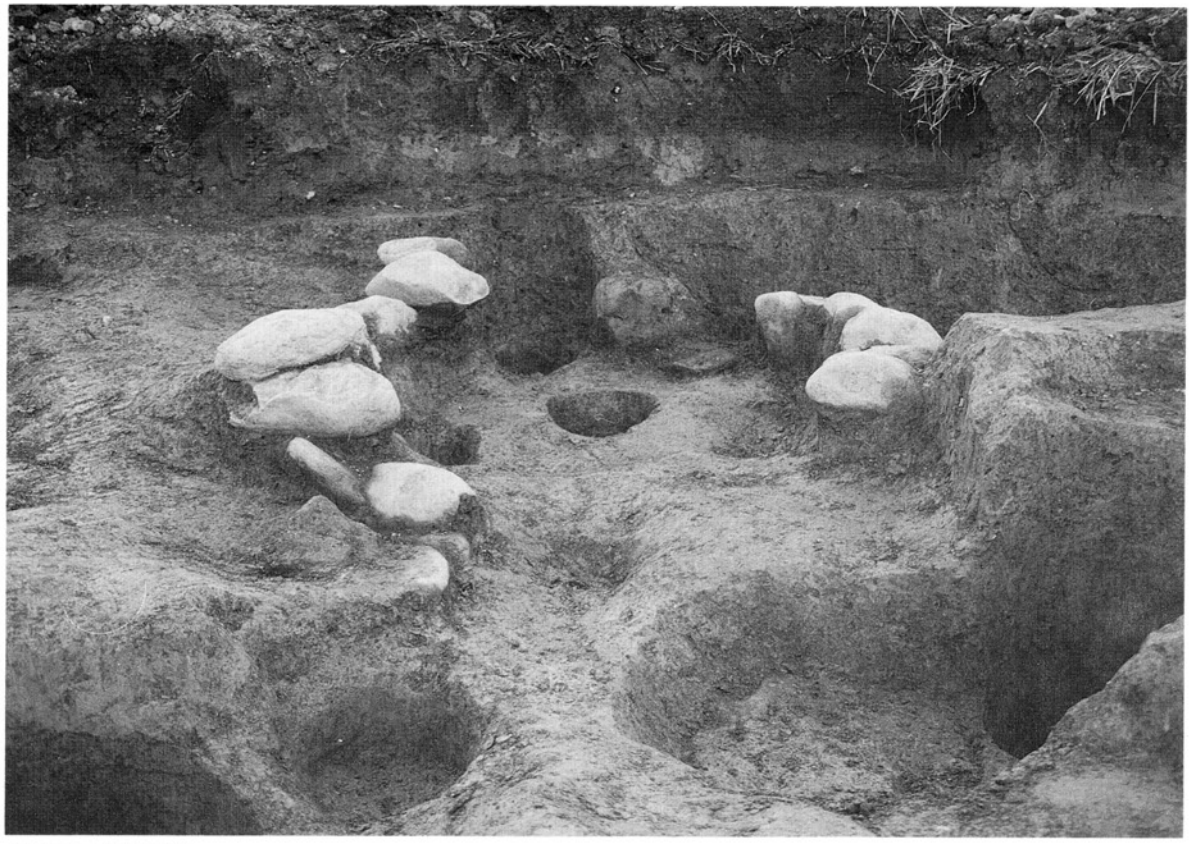
調査後全景（北から）

調査後全景（南から）

ＳＸ３遺物出土状況（東から）

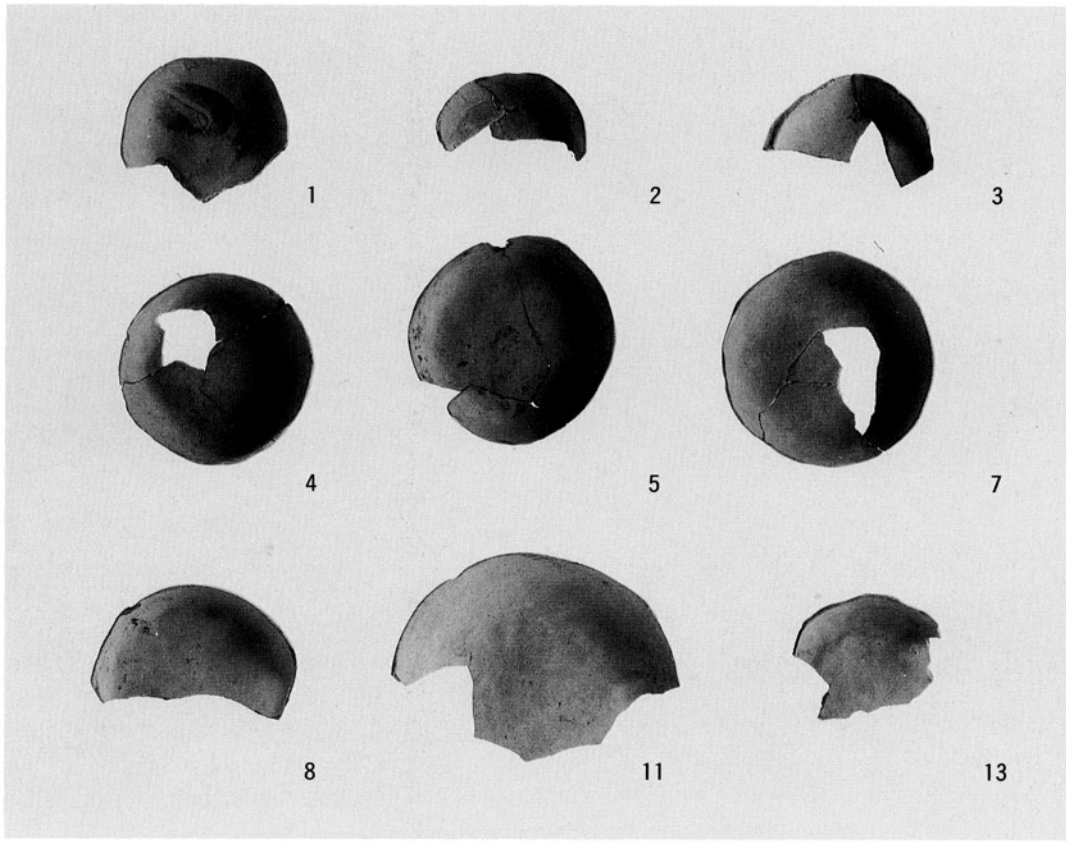
ＳＸ３遺物出土状況（東から）

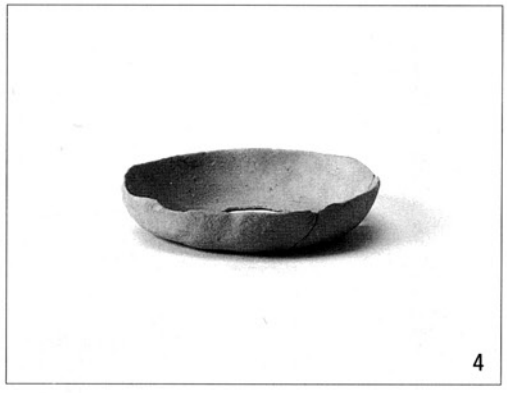
図版 4

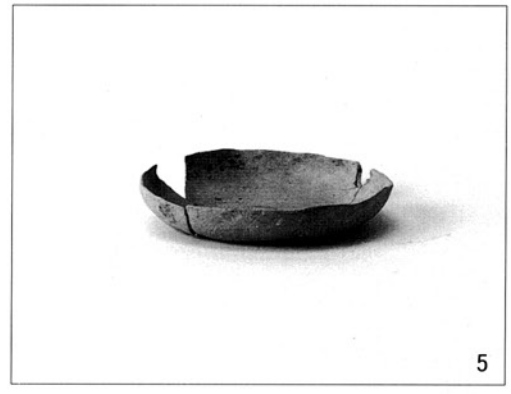


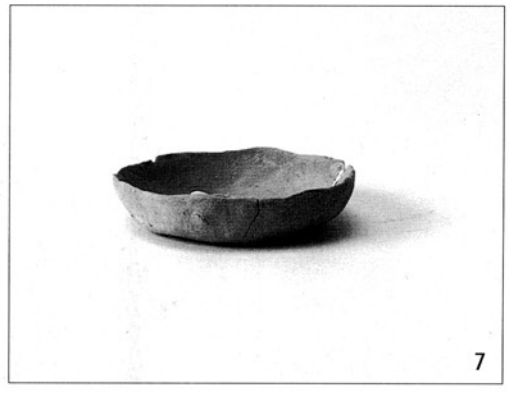
ＳＦ７（東から）

ＳＦ７（西上から）



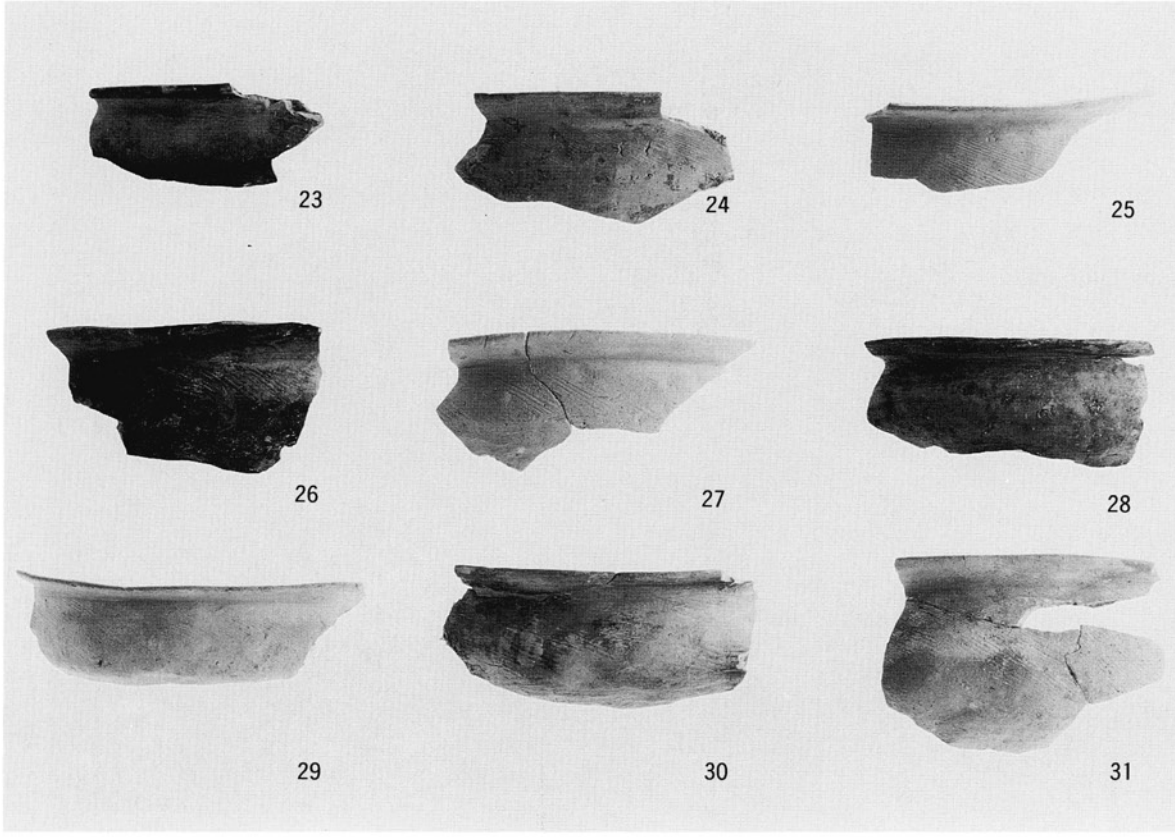


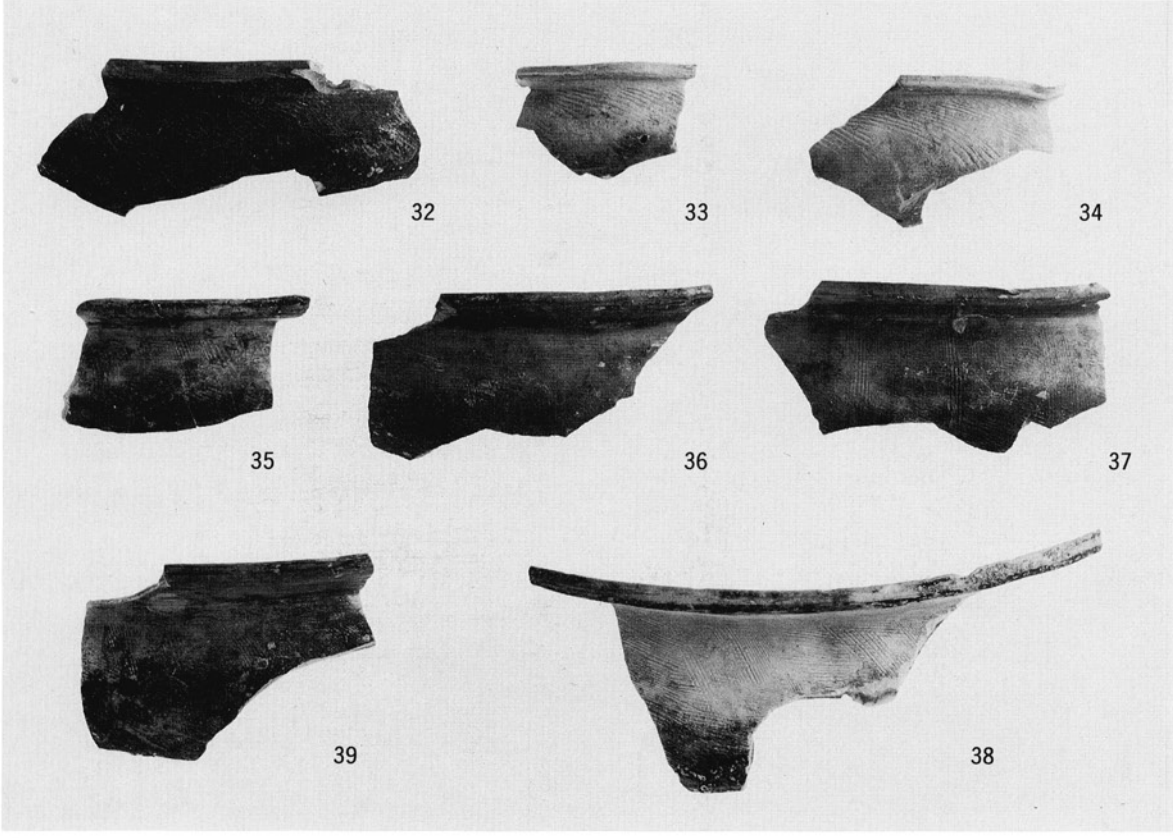




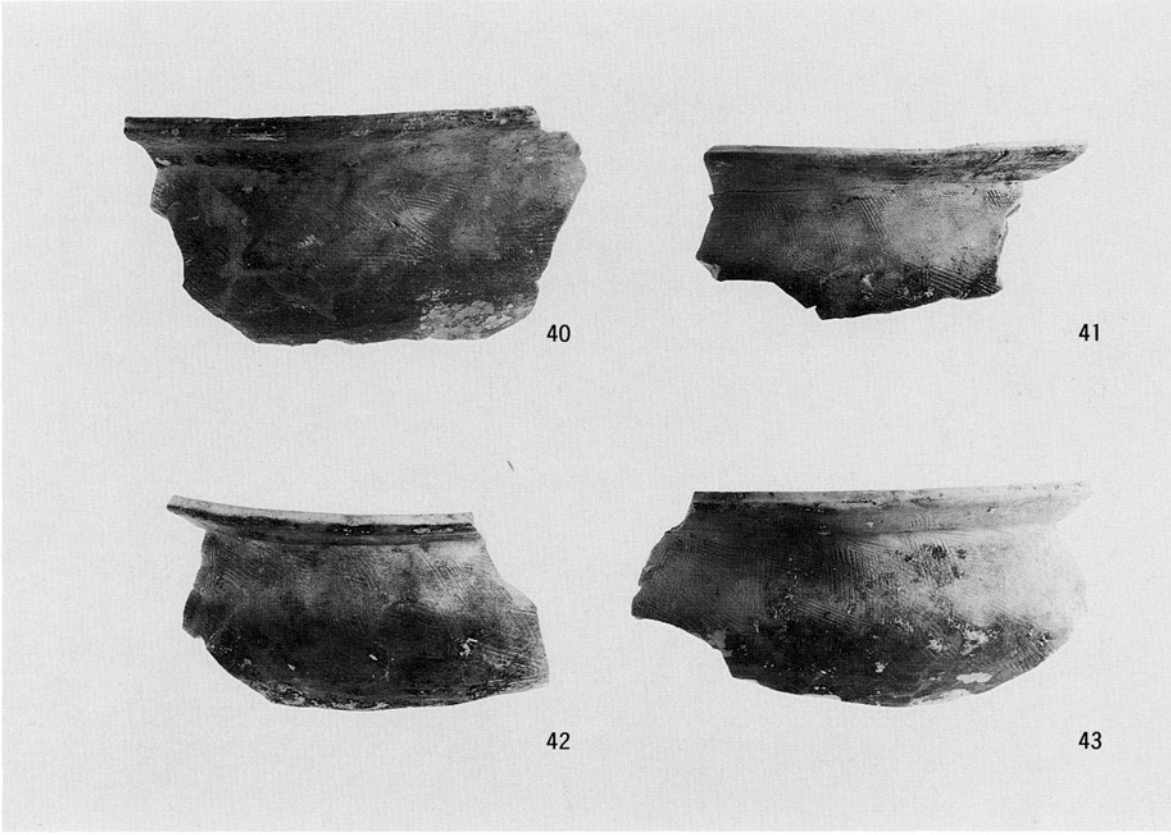
出土遺物（1）

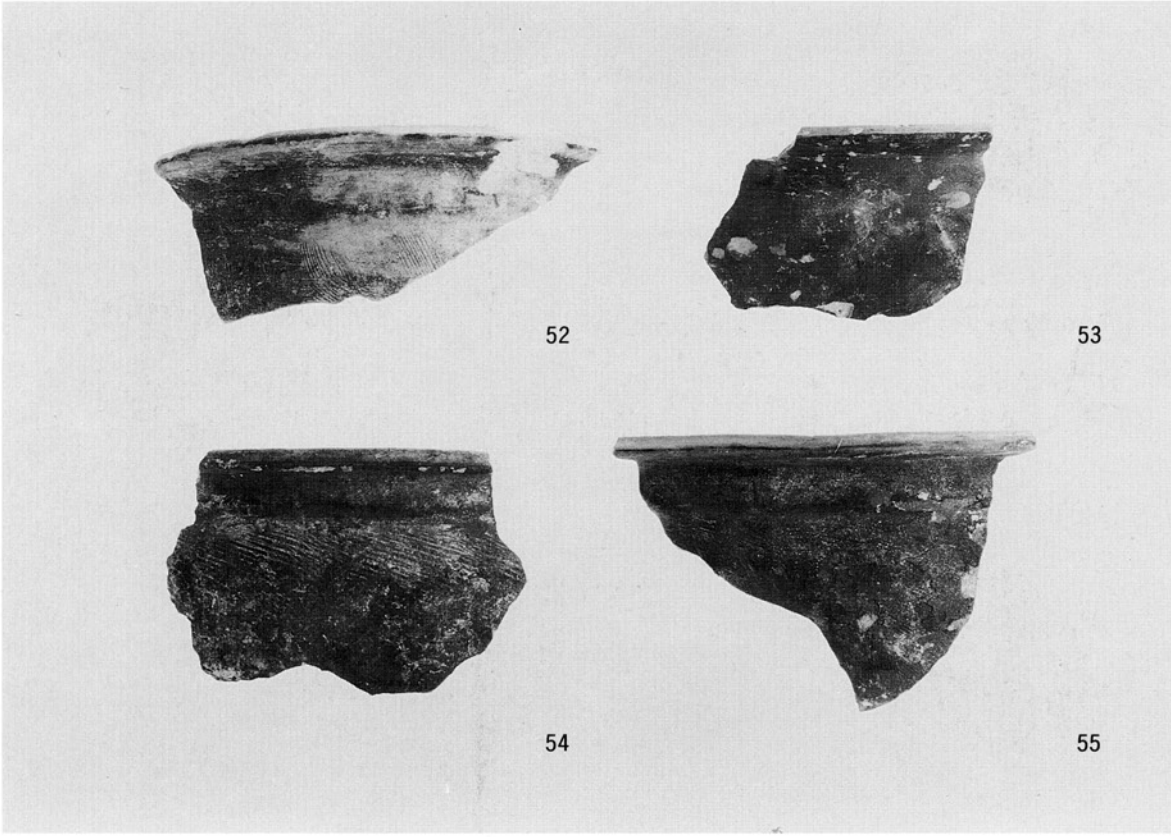
図版 6





出土遺物（2）



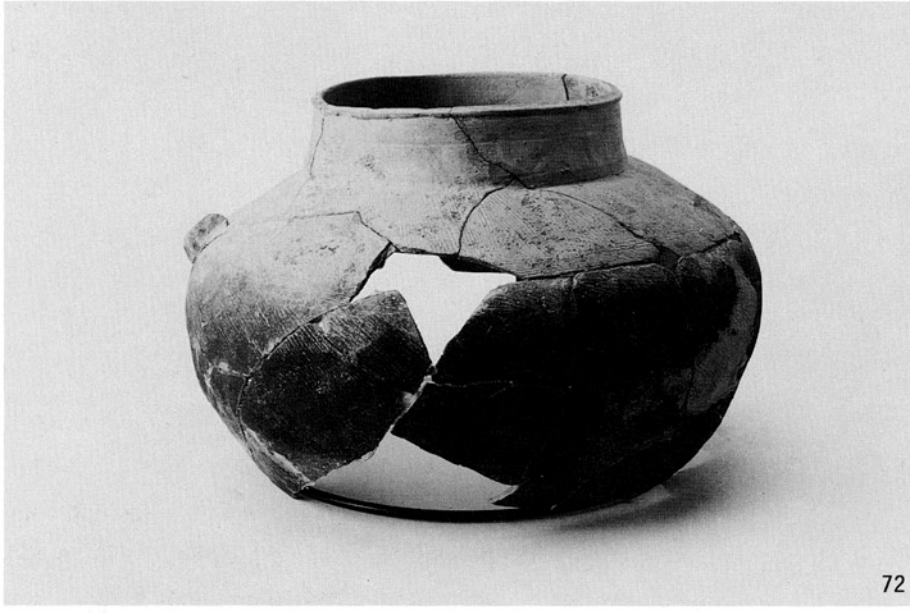


出土遺物（3）

図版 8

60

70



72

出土遺物（4）

Ⅳ．かん志ゆう地区

かん志ゆう地区は、松阪市南東部櫛田集落の東側に位置し、櫛田川左岸の沖積平野上に立地する。現在は標高7.3～8.2mの水田となっている。

今回の調査は、事業によってやむを得ず破壊される用水路（A地区；70㎡）及び調水槽部分（B地区；140㎡）のみ実施した。調査期間は、平成８年10月16日～21日である。

A地区のみ４m毎に小地区の設定を行い、南側よりA－１、A－２…とした。

１．遺　構

調査地の層序は、耕作土である褐灰色土の直下に黄褐色粘質土があり、この黄褐色粘質土上面で遺構が検出された。検出面は現地表面より30cm下である。検出した遺構は、出土遺物から見て、12世紀前半のものが１基あるものの、その他は12世紀後半から13世紀前半にかけてのものである。以下、調査区・遺構毎に記述を行う。

A地区

ＳＤ１　調査区に平行して、ほぼ南北に走る溝である。溝西側の肩が調査区外になるため、幅は不明である。検出面からの深さは約30cmである。溝の方位は、後述のＳＢ７にほぼ平行する。この溝はA－６地区以北で２本になる。この２本の溝は切り合いが認められ、【古】東側の溝（ＳＤ１－ａ）→【新】西側の溝（ＳＤ１－ｂ）となる。但し、出土遺物からは時期の違いは認められない。ＳＤ１－ａは幅80cm、深さ25cmで、断面形態はU字形である。溝の方位はＳＢ７にほぼ平行する。ＳＤ１－ｂは向きが西方に歪曲し、深さ30cmである。

ＳＤ２　A－８・９地区で検出した。ＳＤ１に直交する溝である。ＳＤ１－ａとの切り合い関係は不明である。

ＳＤ３　A－６地区で検出した。ＳＤ１に直交する溝である。ＳＤ１との切り合い関係は不明である。

Pit１　調査区南部、A－２地区で検出した。長径23cm、短径20cm、平面形は隅丸方形である。深さは20cmである。わずかではあるが、山茶椀片及び土師器皿片が出土した。

B地区

ＳＢ７　調査区南東隅で検出した。ＳＢ７の南東部、東西１間・南北２間分の範囲にＳＫ２が位置し、ＳＫ２はＳＢ７に付随する遺構と考えられる。三重県下には建物の東南隅に土坑が造られる例が多数あり[1)]、ＳＫ２を東南隅土坑と捉え得るならば、東西２間、南北３間の掘立柱建物であると考えられる。柱間は東西約1.7m、南北約2.0mになる。柱底の高さは標高5.5から5.8mと一律でない。Pit12・Pit15・Pit23には根石が残存していた。

ＳＤ８　調査区西端で検出した。遺物は僅かに、土師器皿・鍋、陶器椀片が出土した。

ＳＫ１　調査区東南隅より検出した。平面形は隅丸方形であり、長径1.8m、短径1.4mである。断面形は箱形を呈し、深さは12cm程度である。出土遺物は、土坑のうちでは圧倒的に多い。

ＳＫ２　調査区東南隅より検出した。ＳＫ１に切られている。平面形は隅丸長方形であり、長さ3.8m、幅1.8mである。断面形は箱形を呈し、深さは17cm程度である。遺物の出土量はＳＫ１程ではないが、土坑のうちでは比較的多い。

ＳＫ３　調査区東側で検出された。さらに東方へ続いていくものと思われる。遺物はわずかに出土した。

ＳＫ４　調査区北東隅で検出された。平面形は楕円形であり、短径92cmである。断面形は箱形であり、深さは８cmと浅い。遺物はほとんど認められなかった。

ＳＫ５　調査区北東隅で検出された。ＳＫ４に切られている。遺構はさらに調査区の北側へ続いていく。断面形は半円形を呈し、深さは18cmである。埋土には炭化物が多く混入していた。また、出土遺

物も土坑の中では比較的多い。

ＳＫ６　調査区北東隅で検出された。ＳＫ５に切られている。平面形態は不定形を呈し、幅は1.48mである。断面形は箱形であり、深さは８cmと浅い。遺物はそれほど多く認められなかった。

その他Pit　主にＢ調査区において掘立柱建物の柱穴と思われる多数のPitが検出された。平面形態は、ほとんど円又は楕円形である。大きさは、直径30cm程度のものと直径20cm内外の小さなものとに分けられる。柱穴の底の高さは、標高5.5m～5.8mの間に入る。出土遺物はわずかながら、12～13世紀前半のものが確認でき、多くは当該期に属すものと思われる。

註

1）浅尾悟「土坑を伴う中世堀立柱建物について」『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』1991

建物

調査区	遺構番号	規模					柱間寸法		
		間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	特記事項
B	ＳＢ７	3×2	5.20	4.20	21.84	N15°E	1.70	2.00	総柱・根石 個々の柱穴は別記

溝

調査区	遺構番号	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	底レベル(m)	方向	特記事項
A	ＳＤ１	(34.00)	1.20	0.62	5.44	N15°E	
A−8•9	ＳＤ２	(1.80)	1.40	0.29	5.45	N80°W	
A−6	ＳＤ３	(1.80)	0.80	0.33	5.52	N70°W	
B	ＳＤ８	3.14	0.46	0.17	5.57	N10°E	

土坑

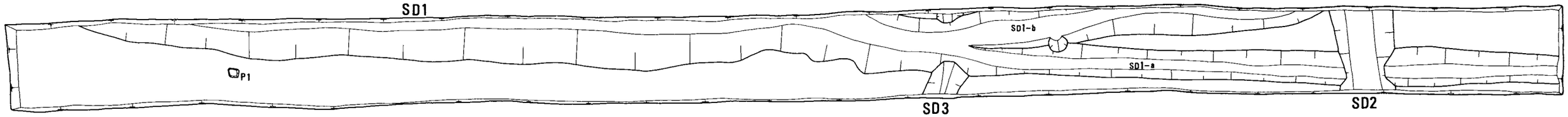
調査区	遺構番号	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	底レベル(m)	特記事項
B	ＳＫ１	1.86	1.44	0.11	5.88	
B	ＳＫ２	3.84	1.80	0.15	5.85	
B	ＳＫ３	1.74	(0.36)	0.09	5.91	
B	ＳＫ４	(0.76)	0.92	0.09	5.96	
B	ＳＫ５	(2.20)	2.24	0.31	5.73	
B	ＳＫ６	(1.52)	1.48	0.08	5.94	

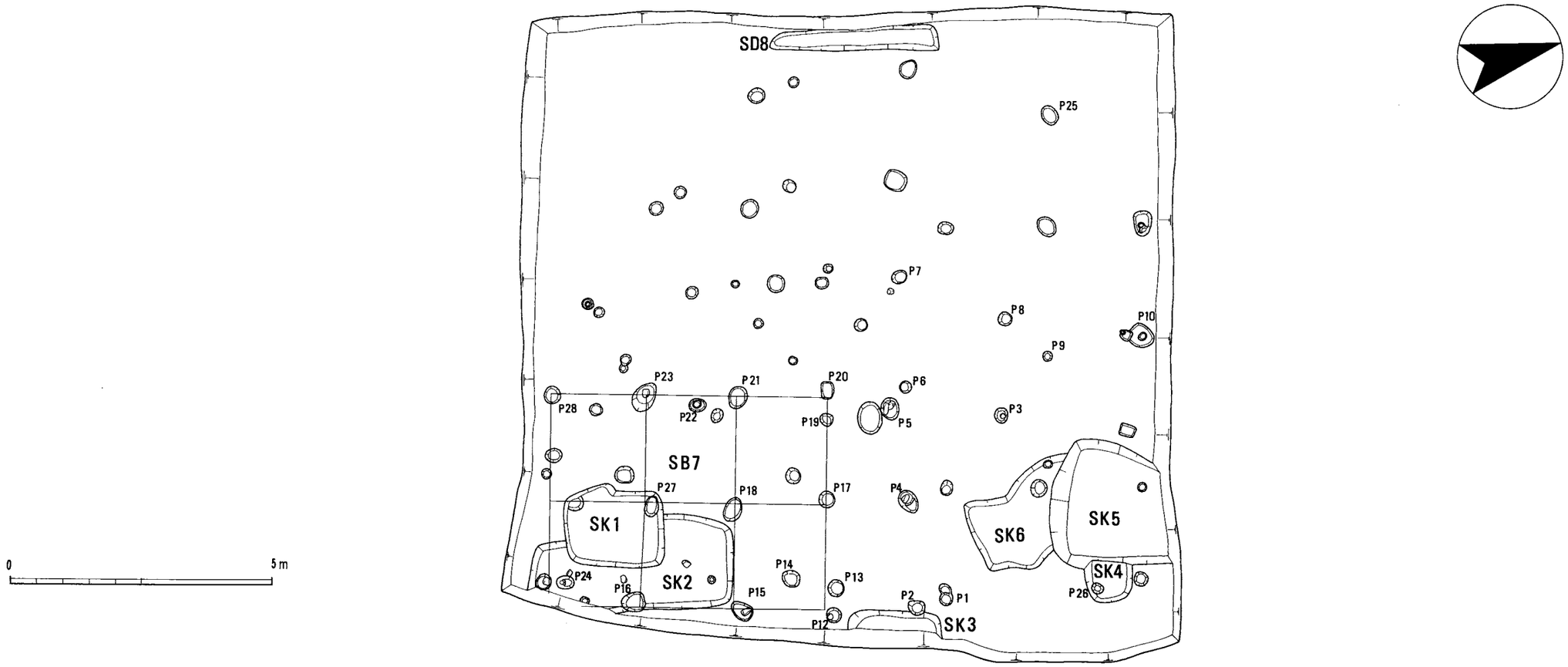
※深さ・底レベルの（　）は根石までの深さ・底レベルの数値を表す。それ以外の（　）は現存部分の数値を表す。

柱穴

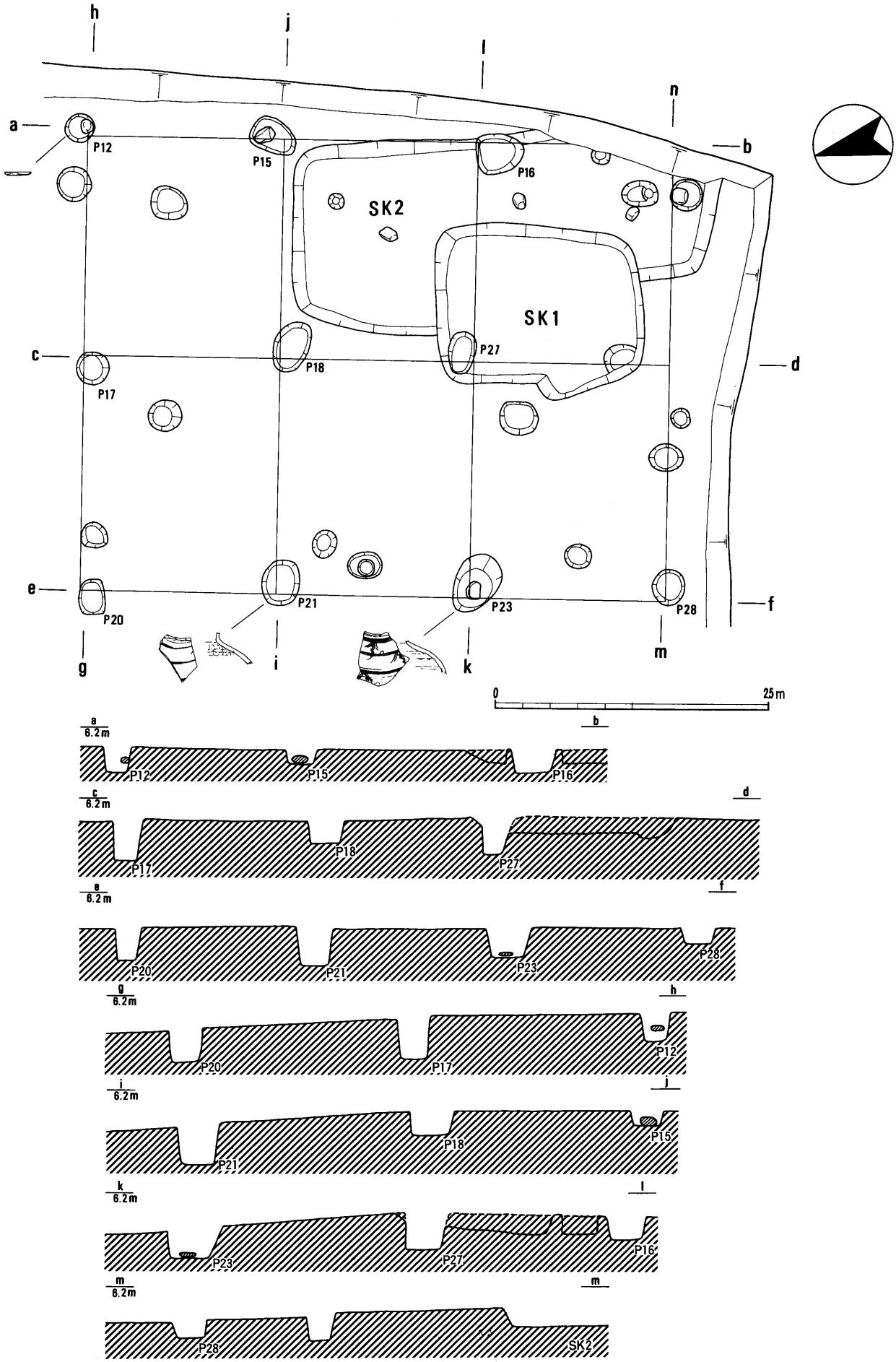
調査区	遺構番号	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	底レベル(m)	出土遺物	特記事項
A−2	Pit1	0.24	0.20	0.20	5.83	土師器皿・陶器椀	
B	Pit1	0.24	0.24	0.42	5.61	白磁皿・陶器椀	
B	Pit1	(0.20)	0.18	0.30	5.70		
B	Pit2	0.32	0.26	0.35	5.56	土師器皿・鍋	
B	Pit3	0.28	0.24	0.35 (0.08)	5.66 (5.88)	土師器小皿	根石
B	Pit4	0.44	0.30	0.26 (0.09)	5.752 (5.92)	土師器小皿・皿・鍋 陶器椀・鉢	根石
B	Pit5	0.41	0.34	0.19 (0.04)	5.78 (5.89)	土師器皿・鍋	根石
B	Pit6	0.22	0.22	0.16	5.74	土師器鍋	
B	Pit7	0.28	0.26	0.40	5.45	陶器椀	
B	Pit8	0.24	0.24	0.35	5.63	土師器	
B	Pit9	0.18	0.16	0.30	5.70	土師器鍋・陶器椀	
B	Pit10	0.46	0.40	0.21	5.78	陶器椀	
B	Pit11	0.40	0.32	0.25	5.70	土師器鍋・陶器椀	
B	Pit12	0.26	0.26	0.24 (0.11)	5.80 (5.93)	土師器小皿・皿 陶器椀	根石・SB7
B	Pit13	0.30	0.30	0.36	5.74	陶器椀	
B	Pit14	0.33	0.30	0.27	5.73	土師器鍋	
B	Pit15	0.44	0.30	0.13 (0.06)	5.87 (5.94)	土師器小皿・皿・鍋	根石・SB7
B	Pit16	0.54	0.36	0.19	5.79	土師器鍋・陶器椀	SB7
B	Pit17	0.30	0.30	0.37	5.64	土師器鍋・陶器椀	SB7
B	Pit18	0.48	0.32	0.20	5.80	白磁椀・陶器椀	SB7
B	Pit19	0.24	0.22	0.23	5.70	土師器	
B	Pit20	0.32	0.24	0.28	5.59	土師器皿・陶器椀	SB7
B	Pit21	0.40	0.34	0.37	5.53	土師器皿・陶器壺	
B	Pit22	0.30	0.24	0.39	5.50		
B	Pit23	0.56	0.36	0.29 (0.25)	5.61 (5.65)	陶器壺	根石・SB7
B	Pit24	0.32	0.23	0.63	7.42	土師器ロクロ皿・皿 鍋・陶器椀	
B	Pit25	0.36	0.30	0.32	5.61	土師器鍋・皿 陶器椀	
B	Pit26	0.20	0.20	0.12	5.93	陶器椀	SK4下Pit
B	Pit27	0.38	0.24	0.33	5.69		
B	Pit28	0.32	0.30	0.15	5.73		

第７表　遺構一覧表





第13図　遺構平面図（1:100）



第14図　ＳＢ７　平面図・断面図（1:50）

2．遺　物

今回の調査で出土した遺物は、210㎡という狭い調査面積であったものの、比較的まとまった状況で多量に認められた。これらの遺物は、極僅かに須恵器及び灰釉陶器を含むが、ほとんどが12世紀後半から13世紀前半の範疇でおさえられるものである。各遺構毎で記述していく。

A区

ＳＤ１（第15図－１～39）

土師器小皿・ロクロ皿・皿・鍋、陶器皿・椀・鉢、白磁などが出土した。出土量は破片数にして、2022点である。

１～５は土師器小皿である。いずれも口径７～９cm、器高１cm程度のものである。外面は全体的に指頭圧痕が認められ、所々ナデている。内面は丁寧にナデている。７～12は土師器皿である。口径12cm～14cmのものが主流を占める。口縁端部が丸く器壁の厚いもの（７・10）、口縁端部が丸く器壁の薄いもの（８）、口縁端部外面を一段強くナデたもの（９・11・12）に大きく分けられる。13～15は土師器鍋である。伊藤裕偉氏編年[1]より見ると、いずれも１段階に相当する。14は頸部に沈線が入る。16～21は陶器皿（山皿）である。いずれも口径８cm程度である。19のみが尾張型のものであり、それ以外は渥美・湖西型のものである。22～35は陶器椀（山茶椀）である。22～24・31が尾張型であり、25～30・32～35が渥美・湖西型である。時期は、24・25・32が藤澤編年第５型式[2]に相当し、22・23・26～31・33～35が第６型式に相当する。30～35は墨書陶器である。いずれも底部外面に墨書が認められる。30は不明瞭であり、あるいは墨痕と捉えるべきものかもしれない。31・32・34・35は筆順より、いずれも「×」と考えられる。33は小片のため詳細は不明だが、他の墨書陶器の出土状況から見て「×」となる可能性もある。37は白磁椀である。外面にはヘラによる縦線文が施される。森本朝子氏分類[3]のＶ－２に相当する。38は青磁杯である。腰部で屈曲し、口縁端部に面を持つ。内外面共に無文であり、龍泉窯系のものである。39は灰釉陶器広口壷の頸部である。内面に粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。これは、他の出土遺物と比べ明らかに時期が遡るものであり、混入品と考えられる。

B区

ＳＢ７（第16図－40～42）

40は小皿である。Pit12より出土。41は渥美産の三筋文壷片である。肩部には２条の筋が３箇所に施される。外面及び内面の頸部までの所には灰釉が掛けられる。Pit21より出土。42も渥美産の三筋文壷片である。肩部には２～３条の筋が３箇所に施され、さらに蓮弁文も描かれる。蓮弁文は、２本の棒状のものを用いて描かれたと思われる。まず、「ハ」の字を書き、その間に波線を書いている。この模様は坪沢古窯[6]出土のものと類似する。41・42は出土遺構こそ異なるが、いずれも一建物を構成する柱穴であり、同一個体と考えられる。12世紀頃のものと思われる。

ＳＫ１（第16図－43～51）

土師器小皿・ロクロ皿・皿・鍋・土錘、陶器椀などが出土した。出土量は土坑のうち最も多く、破片数にして、402点である。

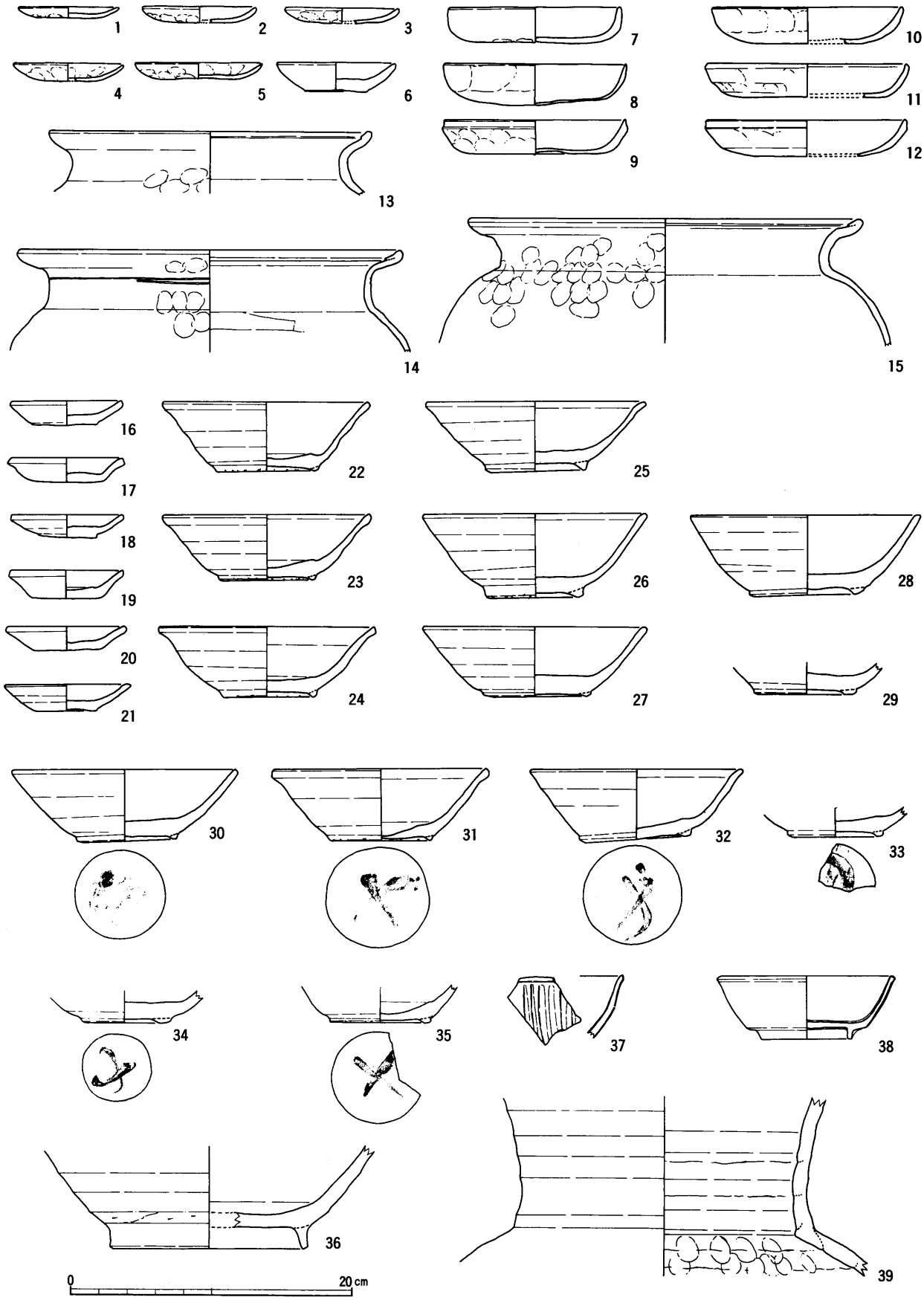
43は土師器小皿である。外面に指頭圧痕が残り、所々ナデている。内面は丁寧にナデている。44～46は土師器皿である。底部より屈曲して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。45・46には粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。47・48は、土師器鍋である。48は伊藤氏編年の２段階に相当する。49は土錘である。50・51は山茶椀である。50は渥美・湖西型であり、51は尾張型である。51には底部外面に「一」と墨書されている。

ＳＫ２（第16図－52～60）

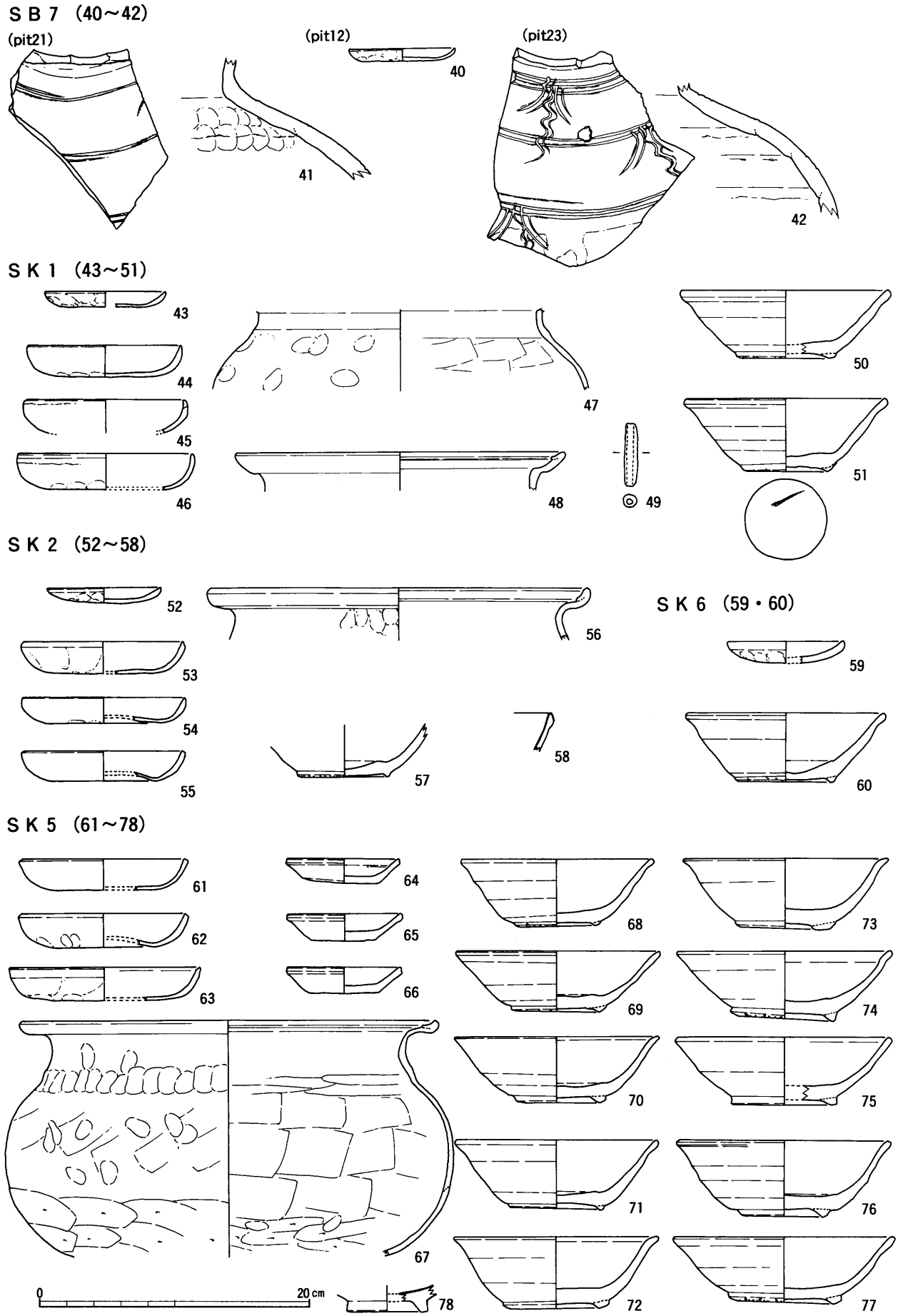
土師器小皿・ロクロ皿・皿・鍋、陶器皿・椀、白磁などが出土した。出土量は破片数にして、273点である。

52は土師器小皿である。53～55は土師器皿である。53は口縁端部を一段強くナデる。56は土師器鍋であ

ＳＤ１（1～39）



第15図　Ａ地区出土遺物実測図（1:4）



第16図　Ｂ地区出土遺物実測図（1）（1:4）

る。口縁端部は強くナデられ、伊藤氏編年の１段階に相当する。57は尾張型の山茶椀である。58は白磁椀である。

ＳＫ５（第16図－61～78）

土師器皿・鍋、陶器皿・椀・鉢、瓦器、白磁などが出土した。出土量は破片数にして、220点である。

61～63は土師器皿である。63は幅広く強くナデている。64～66は山皿である。いずれも渥美・湖西型である。67は土師器鍋である。頸部から体部上半にかけては、指おさえ及びナデで調整され、ハケメは認められない。体部下半はケズられる。伊藤氏編年の１段階に比定される。68～77は山茶椀である。68・71が尾張型であり、あとは渥美・湖西型である。78は白磁椀である。

ＳＫ６（第16図－59・60）

59は小皿である。器壁が厚く、口縁部は幅広くナデている。60は山茶椀である。

Pit３（第17図－79）

79は小皿である。器壁が厚く、口縁部は幅広くナデている。

Pit４（第17図－80）

80も土師器小皿である。口径が小さく、外面は基本的に指おさえがなされ、一部ナデている。

Pit５（第17図－81）

81は土師器皿である。口縁端部が丸く、器壁の厚いものである。

Pit７（第17図－82・83）

82・83共に山茶椀である。いずれも渥美・湖西型のものと思われる。

Pit22（第17図－84）

84は土師器皿である。

Pit26（第17図－85）

ＳＫ４の掘削中に検出した柱穴である。高台部分が逆三角形を呈し、全体的に丁寧なつくりとなっている。口縁部には現存部分において２箇所輪花が認められる。尾張型第３型式に比定できよう。

包含層（第17図－86・87）

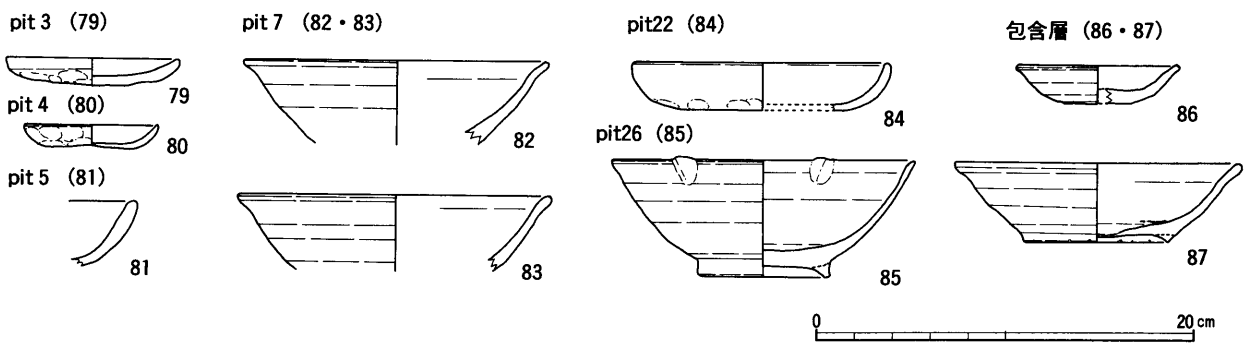
86は山皿である。87は山茶椀であり、尾張型第６型式のものに比定できる。

註

１）伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie History』vol. 1　1990

２）藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994

３）森本朝子「博多出土貿易陶磁分類表」『博多―高速鉄道関係調査（１）―』別冊　福岡市教育委員会　1984



第17図　Ｂ地区出土遺物実測図（2）（1:4）

図版番号	調査区	遺構番号	区分	地区	産地	材質	器種	残存度	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	特記事項	登録番号
第15図1	A	SD1		4	在地	土師器	小皿	口3	7.2			外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	やや粗 1mm以下の小石	やや不良	にぶい黄橙色		006-02
2	A	SD1		4	在地	土師器	小皿	口4	7.8		1.1	外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	密	良	浅橙色		003-03
3	A	SD1		4	在地	土師器	小皿	口5	8.0			外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	やや密	並	にぶい橙色		006-04
4	A	SD1		4	在地	土師器	小皿	口3	7.8			外面；オサエ・ナデ 内面；オサエ・ナデ	やや粗 1mm以下の小石	並	にぶい黄橙色		006-01
5	A	SD1		4	在地	土師器	小皿	口6	9.0			外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	粗 2mm以下の小石	やや不良	橙色		006-03
6	A	SD1		4	在地	土師器	ロクロ皿	口5 底12	8.2	4.4	2.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 微砂粒	並	浅黄橙色		003-01
7	A	SD1		3	在地	土師器	皿	口3	12.0		2.5	外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	やや密 3mmの小石・微砂粒	並	にぶい橙色		001-04
8	A	SD1		8	在地	土師器	皿	口12	12.6		2.6	外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	密	良	浅黄橙色		001-03
9	A	SD1		4	在地	土師器	皿	口3	12.9		2.4	外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；ナデ	やや粗 2mm以下の小石・微砂粒	並	浅黄橙色		007-02
10	A	SD1		4	在地	土師器	皿	口4	13.6		2.6	外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	やや粗 1mmの小石	並	浅黄橙色		007-03
11	A	SD1		4	在地	土師器	皿	口3	14.4		2.3	外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；オサエ・ナデ	やや粗 1mm以下の小石	やや不良	浅黄橙色		005-05
12	A	SD1		4	在地	土師器	皿	口3	14.2		2.6	外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；ナデ	やや粗 1mm以下の小石	並	にぶい橙色		005-04
13	A	SD1		3	在地	土師器	鍋	口2	22.8			口縁部ヨコナデ 外面；オサエ・ナデ	やや密	並	灰白色	スス	001-05
14	A	SD1		4	在地	土師器	鍋	口3	26.6			口縁部ヨコナデ 外面；オサエ・ナデ	粗 3mm以下の砂粒	並	褐灰色	スス・コゲ	010-02
15	A	SD1		4	在地	土師器	鍋	口4	27.3			口縁部ヨコナデ 外面；オサエ・ナデ	粗 2mm以下の砂粒	並	灰白色	コゲ	010-01
16	A	SD1		4	渥美	陶器	皿	完存	7.6	4.5	1.7	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 微砂粒	良	灰白色		002-02
17	A	SD1		3	渥美	陶器	皿	完存	7.8		1.7	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密	良	灰白色		002-01
18	A	SD1		4	渥美	陶器	皿	口8 底12	7.9	4.0	1.6	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 1～3mmの小石	並	灰白色		009-03
19	A	SD1		4	尾張	陶器	皿	ほぼ完存	7.9	4.9	2.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2～4mmの小石・微砂粒	並	灰白色		002-03
20	A	SD1		2	渥美	陶器	皿	口8 底12	8.1	4.8	1.7	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	密	良	灰白色		002-04
21	A	SD1		3	渥美	陶器	皿	口9 底12	8.3	4.3	1.9	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	密	良	灰白色		002-05
22	A	SD1		4	尾張	陶器	椀	完存	14.6	6.8	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	粗 3mm以下の小石	良	灰白色		004-02
23	A	SD1		4	尾張	陶器	椀	口10 底12	14.7	6.4	4.6	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2mm以下の小石・微砂粒	並	灰白色	スス	009-02
24	A	SD1		4	尾張	陶器	椀	ほぼ完存	15.2	6.5	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2mm以下の小石・微砂粒	並	灰白色		009-01
25	A	SD1		4	渥美	陶器	椀	口10 底12	15.5	6.5	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	密 微砂粒	並	灰白色		001-02
26	A	SD1	b	6	渥美	陶器	椀	口9 底12	15.6	6.9	5.9	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 5mm以下の小石・微砂粒	良	灰白色		011-01
27	A	SD1		6	渥美	陶器	椀	口2 底12	15.9	7.6	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 3mm以下の小石	良	明青灰色		005-02
28	A	SD1		8	渥美	陶器	椀	口4 底12	16.2	7.0	5.7	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 3mmの小石	並	灰白色	摺ってある	001-01
29	A	SD1	a	5	渥美	陶器	椀	底12		7.2		内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 1mmの小石	並	灰白色	墨痕	008-01
30	A	SD1		4	渥美	陶器	椀	口7 底12	15.8	6.3	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 3mm以下の小石	やや良	灰白色	墨痕	004-03
31	A	SD1		4	渥美	陶器	椀	口2 底12	15.2	7.2	5.1	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2mm以下の小石・微砂粒	並	灰白色	墨書	007-04
32	A	SD1	a	5	渥美	陶器	椀	口10 底12	15.2	7.8	5.2	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密	並	灰白色	墨書	007-01
33	A	SD1	3		渥美	陶器	椀	底3			5.8	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2mm以下の小石・微砂粒	並	灰白色	墨書	018-01
34	A	SD1		4	渥美	陶器	椀	底12		6.1		内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 1～4mmの小石	並	灰白色	墨書	008-03
35	A	SD1		3	尾張	陶器	皿	底8		6.6		内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 3mmの小石・微砂粒	並	灰白色	墨書	002-06
36	A	SD1		4	尾張	陶器	鉢	底5		14.0		内外面ロクロナデ	粗 8mm以下の小石	良	灰白色	摺ってある	005-01
37	A	SD1			中国	青磁	椀	口1				内外面ナデ→施釉	密	良	素地；灰白色		018-02
38	A	SD1		3	中国	青磁	皿	口2 底5	12.6	6.4	4.5		密	良	素地；灰白色		003-04
39	A	SD1		4	瀬戸	灰釉陶器	壺	頸4				外面；ロクロナデ→施釉 （灰釉） 内面；ロクロナデ・ナデ・オサエ	密	良	灰白色		004-01
第16図40	B	Pit12			在地	土器	小皿	口6	7.7		0.9	外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	密 微砂粒	並	灰白色		016-05
41	B	Pit21			渥美	陶器	壺	肩3				外面；ナデ→施釉 内面；オサエ・ヨコナデ	密 1mm以下の砂粒	良	青灰色		019-01
42	B	Pit23			渥美	陶器	壺	肩2				外面；ナデ→施釉 内面；オサエ・ヨコナデ	密 2mm以下の小石・白砂粒	良	青灰色		018-05
43	B	SK1			在地	土師器	小皿	口5	8.8			外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	密 微砂粒	並	灰白色		015-06
44	B	SK1			在地	土師器	皿	口2	11.4		2.3	外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	やや密 2mm以下の小石・微砂粒	良	浅黄橙色		015-03

第8表　出土遺物観察表（1）　※残存度について、それぞれ口は口縁部を、頸は頸部を、肩は肩部を、底は底部を表す。
また、その後ろの数字は1/12を1として表記した。

図版番号	調査区	遺構番号	区分	地区	産地	材質	器種	残存度	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	特記事項	登録番号
第16図45	B	SK1			在地	土師器	皿	口2	11.4			外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	密 微砂粒	並	灰白色	粘土紐接合痕	015-04
46	B	SK1			在地	土師器	皿	口3	12.8			外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；ナデ	密 微砂粒	並	灰白色	粘土紐接合痕	015-05
47	B	SK1			在地	土師器	鍋	頸5				口縁部ヨコナデ 外面；オサエ・ナデ	やや粗 2mm以下の 小石・微砂粒	良	浅黄橙色	スス	018-04
48	B	SK1			在地	土師器	鍋	口2	24.1			内外面ヨコナデ	やや粗 微砂粒	並	にぶい橙色	スス・コゲ	017-03
49	B	SK1			在地	土師器	土錘	一部欠損	長さ4.7	幅1.0	孔径0.4		密 微砂粒	並	にぶい黄橙色		017-06
50	B	SK1			渥美	陶器	椀	口2 底5	15.6	6.2	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	粗 2mm以下の 小石・微砂粒	良	灰白色	スス	015-02
51	B	SK1			尾張	陶器	椀	口2 底12	15.0	6.0	5.4	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 5mm以下の 小石・微砂粒	良	灰白色	墨書	015-01
52	B	SK2			在地	土師器	小皿	完存	8.4		1.1	外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；ナデ	粗 2mm以下の 小石・微砂粒	並	灰白色		013-08
53	B	SK2			在地	土師器	皿	口6	11.8		2.4	外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；ナデ	やや粗 2mm以下 の小石・微砂粒	やや不良	灰白色		013-05
54	B	SK2			在地	土師器	皿	口3	12.0		1.9	外面；オサエ・ナデ 内面；オサエ・ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒	並	灰白色		013-06
55	B	SK2			在地	土師器	皿	口5	12.0		2.2	外面；オサエ・ナデ 内面；オサエ・ナデ	やや粗 2mm以下 の小石・微砂粒	並	灰白色		013-07
56	B	SK2			在地	土師器	鍋	口3	27.6			口縁部ヨコナデ 外面；オサエ・ナデ	やや粗 3mm以下の砂粒	並	浅黄橙色		012-03
57	B	SK2			尾張	陶器	椀	底12		6.0		内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗	良	灰白色		013-04
58	B	SK2			中国	白磁	椀	口1				内外面ロクロナデ→施釉	密	良	灰白色		013-10
59	B	SK6			尾張	陶器	椀	口1 底12	14.5	7.3	5.1	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2mm以下 の小石・微砂粒	良	灰白色	スス・摺ってある	011-02
60	B	SK6			在地	土師器	皿	口4	8.5		1.6	外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒	並	褐灰色		011-03
61	B	SK5			在地	土師器	皿	底3	12.4		2.3	外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	やや粗 2mm以下 の小石・微砂粒	並	灰白色		008-04
62	B	SK5			在地	土師器	皿	口4	12.5		2.5	外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；ナデ	粗 3mm以下の 小石・微砂粒	やや不良	灰白色		013-09
63	B	SK5			在地	土師器	皿	口3	14.2		2.5	外面；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内面；ナデ	やや粗 2mm以下 の小石・微砂粒	並	にぶい黄橙色		008-02
64	B	SK5			渥美	陶器	皿	口10 底12	8.3		1.8	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2mm以下 の小石・微砂粒	良	灰白色		013-01
65	B	SK5			渥美	陶器	皿	口7 底12	8.4	4.7	2.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗	良	灰白色		013-02
66	B	SK5			渥美	陶器	皿	口7 底12	8.4	5.2	2.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密	良	灰白色		013-03
67	B	SK5			在地	土師器	鍋	口3	30.8			口縁部ヨコナデ 外面；オサエ・ナデ・ケズリ 内面；オサエ・ナデ・ケズリ	やや密 3mm以下の砂粒	良	褐灰色	スス・コゲ	020-01
68	B	SK5			尾張	陶器	椀	完存	14.2	5.4	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 2mm以下 の小石・微砂粒	良	灰白色		014-01
69	B	SK5			渥美	陶器	椀	口8 底12	14.8	6.0	4.5	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2mm以下 の小石・微砂粒	良	灰白色		012-02
70	B	SK5			渥美	陶器	椀	口11 底12	15.0	5.5	4.9	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 3mm以下 の小石・微砂粒	良	灰白色		012-01
71	B	SK5			尾張	陶器	椀	口5 底12	15.0	6.5	5.1	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2~4mm の小石・微砂粒	並	灰白色		014-06
72	B	SK5			渥美	陶器	椀	口6 底12	15.1	6.0	5.3	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 微砂粒	良	灰白色		014-05
73	B	SK5			渥美	陶器	椀	口8 底12	15.2	5.0	5.2	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 2~4mm の小石・微砂粒	並	灰白色		014-03
74	B	SK5			渥美	陶器	椀	口7 底12	16.0	7.0	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	密	良	灰白色	スス・重ね焼き痕	014-04
75	B	SK5			渥美	陶器	椀	口8 底4	16.0	6.8	5.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密	良	明紫灰色		012-04
76	B	SK5			渥美	陶器	椀	口2 底6	16.0	5.7	5.6	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	密	良	灰白色		012-05
77	B	SK5			渥美	陶器	椀	口8 底12	16.4	6.5	4.9	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 5mmの 小石・微砂粒	良	灰白色		014-02
78	B	SK5			中国	白磁	椀	底3			6.0	外面；ケズリ→施釉 内面；ナデ→施釉	密	良	素地；灰白色		018-03
第17図79	B	Pit3			在地	土師器	小皿	口8	9.2		1.5	外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	粗 5mm以下の 小石・微砂粒	並	灰白色		016-06
80	B	Pit4			在地	土師器	小皿	口6	7.0		1.2	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 2mm以下 の小石・微砂粒	良	灰白色		016-04
81	B	Pit5			在地	土師器	皿	口2	14.0			外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	粗 4mm以下 の小石・微砂粒	並	浅黄橙色		017-02
82	B	Pit7			渥美	陶器	椀	口3	16.0			内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 微砂粒	良	灰白色	スス	016-01
83	B	Pit7			渥美	陶器	椀	口3	16.6			内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや粗 微砂粒	良	灰白色		016-02
84	B	Pit22			在地	土師器	皿	口9	13.6			外面；オサエ・ナデ 内面；ナデ	やや密 2mm以下 の小石・微砂粒	並	褐灰色		017-01
85	B	Pit26			渥美	陶器	椀	口3 底12	16.0	7.0	6.2	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 微砂粒	並	浅黄橙色	輪花	016-03
86	A	包含層		6	渥美	陶器	皿	口5	8.6	3.6	2.0	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	密 微砂粒	良	灰白色		017-05
87	A	包含層		6	尾張	陶器	椀	口5 底12	15.3	7.6	4.2	内外面ロクロナデ 底部糸切痕	やや密 4mm以下 の小石・微砂粒	良	灰白色	重ね焼き痕	017-04

第9表　出土遺物観察表（2）

3．結　　語

①　遺構について

今回の調査において、A区では溝が、B区では掘立柱建物及び土坑が検出された。いずれも、12世紀末から13世紀前半にかけてのものとして捉えられる。

今回明らかに掘立柱建物として捉えられたのは、ＳＢ７のみであった。しかし、この周辺では多数の土坑が確認されており、そのうちのいくつかには根石が残存するものもあり、多くは建物の柱穴と考えられる。このことから、建物が１時期に何棟か建っていたこと、あるいは何度か建て替えられたであろうことは言うまでもない。

ＳＢ７には、南東部にＳＫ２が位置し、柱に規制された形で東西１間、南北２間の間にちょうどおさまる。ＳＫ２は明らかにＳＢ７に付随するものといえよう。また、ＳＢ７はＳＤ１とほぼ方向を揃え、なおかつＳＤ１の向きは条里の方向とほぼ同じであることも興味深い。おそらくＳＤ１はＳＢ７他の屋敷地を区画するための溝と思われ、今回の調査区は集落の一部として捉えられる。

さらに、今回の調査でごく限られた時期の遺構が検出されたことについて、現櫛田集落周辺の地形を見てみると、かん志ゆう地区の北及び西側が自然堤防であり、東側が後背湿地である。少なくとも12世紀末～13世紀前半にかけては居住域の縁辺部であったのが、その後は田畠など居住とは別の目的で利用されていたと思われる。集落は、微高地となる現櫛田集落の東部・北部へと移動したことも考えられる。

②　柱穴出土の渥美産壷片について

ＳＢ７西側の２柱穴より、同一個体になると思われる渥美産三筋文壷片が出土した。この壷自体の出土例はそれほど多くなく、比較的珍しいものといえる。多気郡明和町明星地区内遺跡群では、柱痕跡内に土器が投棄されたと考えられるものがある[1]。この事例とは土器と陶器の違い、今回の調査では建物の西側に偏り、なおかつ隣り合う柱穴で発見されたこと、また今回の調査において陶器片がＳＢ７築造前に投棄されたのか、ＳＢ７築造後に投棄されたのかが判然としないところであり、その状況は異なる。この意味するところは、前例と異なるのかもしれないが、柱穴に土器を投棄することは共通しており、何らかの意味を有していたのかもしれない。さらなる類例の増加を待ちたい。

③　ＳＤ１出土の墨書陶器について

今回の調査では、墨痕かというものも含め、Ａ・Ｂ地区含めて７点出土した。この内Ａ地区ＳＤ１より出土したものが６点、Ｂ区ＳＫ１より出土したものが１点である。さらに、ＳＤ１出土の墨書は墨痕と思われるもの１点を除き、「×」と見なし得る。また、ＳＤ１出土の墨書陶器は、いずれもＡ－３～５の間より出土したものである。

１遺跡内に同じ文字・記号の書かれた墨書が何点かまとまって出土する例は、亀山市山城遺跡[2]・津市宮ノ前遺跡[3]・玉城町蚊山遺跡[4]等がある。さらに、１つの遺構内でもある程度限られた範囲に墨書陶器が認められることから、何らかの意味を持って投棄された可能性は充分考えられる。

④　土師器・陶磁器の出土量計測について

今回の調査では、狭い面積ながら多くの出土遺物があった。また、ほとんどの遺物は平安時代末から鎌倉時代にかけてと（山茶椀の時期でいうならば、藤澤編年の第５～６型式）時期も比較的まとまっていた。そこで、特に遺物出土量の多かったＡ区ＳＤ１、Ｂ区ＳＫ１、ＳＫ２、ＳＫ５を主として、どの地区（遺構）からどのような器種の土師器・陶磁器がどのくらいの量出土したか、計測を試みた。

ａ）計測の方法

それぞれ、下記の項目を設け、一覧表の形式で表計算ソフトに入力し、ＦＤに記録を行った。

材質・産地・器種…材質は大きく土師器・陶器・瓦器・磁器に分けられる。以下、材質毎に産地・器種を記述すると、土師器は南伊勢系のものである。

器種は小皿・皿・ロクロ皿・鍋がある。陶器は大きく施釉陶器と無釉陶器（通称山茶椀）に分けられる。施釉陶器の産地には常滑・渥美・瀬戸があり、器種は壷・甕がある。無釉陶器は、瀬戸・猿投・常滑など細部にわたる産地同定は困難であり、大きく尾張型と渥美・湖西型とに分けておくに留める。器種は椀・小皿・鉢である。瓦器は小片のため、産地は大和あるいは伊賀という程度しかいえず、さらに器種までは不明である。磁器は中国より輸入された青磁・白磁に限られる。

口縁部残存率…本来口縁部が完存していたときを12としてそのうちどれだけ残存しているかを表したもの。１／12未満＝１、１／12～２／12未満＝２というように、切り上げて記述した。

口径…口縁部径を表す。

使用痕…明らかに使用したとわかる痕跡。スス・コゲ・タールなどがある。また、何らかの意味をもって書かれた墨書もこの項に記入した。

破片数…基本的に２cm×２cm以下の小片は、計測から除外している。また、接合後のものも、接合前の数値で記載した。

ｂ）各遺構毎の概況

Ａ区ＳＤ１

口縁部残存率から見た総遺物量は、1001（単純に見た場合の個体数は1001／12＝83.42個分となる）であった。この内土師器が535（ＳＤ１全体の出土遺物を100％として、53.5％）、陶器が463（46.3％）であり、両者はほぼ１：１で拮抗した形となる。

また、地区毎に見ていくと、遺物はＡ－３・４地区辺りに集中し、それ以南、以北に向かって徐々に少量になっていく。

Ｂ区ＳＫ１

口縁部残存率から見た総遺物量は、227（18.92個分）であった。この内土師器が180（80.7％）、陶器は43（19.3％）となる。

ＳＫ２

口縁部残存率から見た総遺物量は、117（9.75個分）であった。この内土師器が90（76.9％）、陶器が26（22.2％）となる。

ＳＫ５

口縁部残存率から見た総遺物量は、183（15.25個分）であった。この内土師器が35（19.1％）、陶器が148（80.9％）である。土師器：陶器がほぼ２：８となり、陶器の方が圧倒的に多い。

ｃ）まとめ

以上、それぞれ遺構毎で出土遺物を見てきたが、計測の過程で明らかになったことを若干述べておきたい。

まず、陶器（山茶椀）の産地について見てみたい。口縁部残存率の総計より見た尾張型山茶椀と渥美・湖西型山茶椀の比率は27.7％：72.3％であった。この数値は、当該期の南勢地方の他集落とほぼ同じようなあり方を示す。但、遺構毎で見ていくと、ＳＤ１・ＳＫ２・ＳＫ５は尾張型山茶椀の割合が２割から２割５分を示すのに対し、ＳＫ１のみ３割５分とかなり高い比率を示している。南勢地域では第５型式から第６型式にかけてそれまで渥美・湖西型が大多数を占めていたのが少しずつ減少し、その分尾張型の比率が増す傾向にある[5]。ＳＫ１とＳＫ２は遺構より（古）ＳＫ２→（新）ＳＫ１という関係であり、南勢地域の傾向にリンクしたものとも考えられる。いずれにしても山茶椀の産地より見た場合普遍的なあり方をしていると思われる。

次に、遺構毎の組成について見てみたい。まず、ＳＫ１・２とＳＫ５の組成の違いが挙げられる。ＳＫ１・２は土師器：陶器がほぼ８：２であるのに対し、ＳＫ５は全く逆転し、土師器：陶器がほぼ２：８を示すのである。破片数で見ても同じ様相を示している。また、ＳＫ１・２は用途別に見ても土師器皿類が７割、土師器鍋が１割程度と同様の比率となる。

ＳＫ２は掘立柱建物の南東隅にあたる土坑として捉えられる。ＳＫ１は規模こそ異なるものの、ＳＫ２とほぼ同位置に造られ、その周囲には現在の段階では建物であるとは言い難いが、一部柱穴が並ぶのが確認される。断定できないまでも、ＳＫ１がＳＫ２と同じような土坑であった可能性は高い。ＳＫ５は調査区外へ続くため、全体の形状及び周囲の遺構との関連は判然としないが、現在の状況では、建物に付随したものとは言い難いこと、埋土に焼土が混入していたこともあわせて、ＳＫ１・２とは性質を異にする土坑と考えられる。しかし、現時点ではＳ

Ｋ５がどのような性格の土坑なのか明確にはいえない。

次にＳＤ１であるが、ＳＫ１・２とＳＫ５の中庸を呈し、ほぼ１：１となる。このことに関しては、時期がわずかに下るが（共伴遺物である山茶椀が藤澤編年の第６～７型式、一部第８型式もあり）、津市安濃津遺跡群でも遺物組成比が出されている（ＳＤ169）[6]。ここでもかん志ゆうＳＤ１とほぼ同じ傾向を示す。

ところで、同じように当該期の遺物組成比が出されているのに、岩出地区内遺跡群ケカノ辻・角垣内地区[7]がある。この遺跡群は度会郡玉城町に所在し、平成４年度に発掘調査が行われている。岩出地区は伊勢神宮祭主大中臣氏が居を構えていたと考えられる地であり、当該期の遺構が多数検出されている。その内ＳＤ391とＳＥ381の遺物出土量が数えられている。ただ、ＳＤ391に関しては特殊な遺物を含み、「祭祀的な匂いのする遺構」と考えられ、単純な対比は行えない。ＳＥ381は比較的一般的な集落の土器の出方を表していると思われ、これとの比較を試みたい。

岩出ＳＥ381は、第12表のとおりである。単純に材質のみで対比すると、ＳＫ１・２と非常に類似していることがわかる。ＳＫ２が掘立柱建物に付随するものであり、なおかつＳＫ１もその可能性が高いといえる中で、南勢地域での普遍的な集落の遺物の出方とほぼ類似することは興味深い。またこの視点からみても、よりＳＫ５の組成は異なるものであり、明らかにその性格の違いが浮き彫りにされる。しかし、伊勢平野の中で12世紀末～13世紀前半にかけての遺物の集計がなされている例は、現在のところそれ程多くなく、これだけの資料で云々いうことは不可能である。今後も資料の蓄積を行い、少しでも中世集落の解明に至れば…と思う。　（高田恵理子）

註

1）伊藤裕偉「Ｖ多気郡明和町明星地区内遺跡群」『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第２分冊　三重県教育委員会　1989

2）山田猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』　三重県埋蔵文化財センター　1994

3）本堂弘之他『大古曽遺跡・山篭遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　1995

4）前川嘉宏他『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第６分冊　三重県埋蔵文化財センター　1993他

5）前川嘉宏「三重県における山茶椀の出土状況」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994

6）伊藤裕偉『安濃津』　三重県埋蔵文化財センター　1997

7）伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　1996

種類	産地等	器種	口縁部残	比率％	
土師器	南伊勢	小皿	482	13.06	39.56
	南伊勢	皿	972	26.34	
	中北勢	皿	6	0.16	
陶器	尾張	小皿	63	1.71	39.79
	尾張	椀	1,405	38.08	
	尾張	練鉢	71	1.93	1.93
	尾張	壺	3	0.08	0.08
土師器	南伊勢	鍋	686	18.59	18.64
	南伊勢	羽釜	2	0.05	
総計			3,690	100.00	100.00

※「口縁部残」は口縁の1/12を１として集計

第10表　安濃津遺跡群ＳＤ176出土土器構成（口縁部計測）

種類	産地等	器種	口縁部残	比率％	
土師器	南伊勢	小皿	289	4.13	17.57
	南伊勢	皿	935	13.37	
	中北勢	皿	5	0.07	
陶器	尾張	小皿	13	0.18	17.04
	尾張	椀	1,179	16.86	
	尾張	練鉢	91	1.31	1.31
	尾張	小壺	1	0.02	0.02
	尾張	壺	2	0.03	0.06
	信楽	壺	2	0.03	
	知多	甕	8	0.11	0.11
土師器	南伊勢	鍋	4,463	68.83	63.89
	南伊勢	羽釜	4	0.06	
総計			6,992	100.00	100.00

第11表　安濃津遺跡群ＳＤ176出土土器構成（破片数）

質類	産地等	器種	点数	比率（%）		
				個別	機能別	質種別
土師器	南伊勢	小皿	52	45.22	66.09	85.22
		皿	24	20.87		
		鍋（小）	7	6.09	18.26	
		鍋（中）	9	7.82		
		鍋（大）	5	4.35		
		ミニチュア鍋	1	0.87	0.87	
ロクロ土師器		小皿	2	1.74	2.61	2.61
		皿	1	.087		
陶器		小皿	3	2.61	9.56	10.43
		椀	8	6.95		
		甕	1	0.87	0.87	
瓦器		椀	1	0.87	0.87	0.87
青磁		椀	1	0.87	0.87	0.87
			115点	100.00	100.00	100.00

第12表　岩出遺跡群ＳＥ381出土土器組成

材質	器種	産地	口縁部残存量	器種別%	機能別%
土師器	小皿	南伊勢	221	22.1	44.5
	皿		225	22.5	
	鍋		83	8.3	8.3
	ロクロ皿		6	0.6	0.6
土師器計			535		53.5
陶器	皿	尾張	20	2.0	
		渥美・湖西	78	7.8	
	皿計		98		9.8
	椀	尾張	111	11.1	
		渥美・湖西	242	24.1	
		不明	2	0.2	
	椀計		355		35.4
	鉢	尾張	5	0.5	
		渥美・湖西	2	0.2	
		不明	1	0.1	
	鉢計		2		0.8
	壺	瀬戸	8	0.2	0.2
陶器計			463		46.2
白磁	椀	中国	1	0.1	0.1
青磁	皿		2	0.2	0.2
総計			1001	100.0	100.0

第13表　かん志ゆう地区ＳＤ１出土遺物組成表

材質	器種	産地	口縁部残存量	器種別%	機能別%
土師器	小皿	南伊勢	60	26.9	74.4
	皿		106	47.5	
	鍋		14	6.3	6.3
土師器計			180	80.7	80.7
陶器	椀	尾張	16	7.2	
		渥美・湖西	27	12.1	
陶器計			43	19.3	19.3
総計			233	100.0	100.0

第14表　かん志ゆう地区ＳＫ１出土遺物組成表

材質	器種	産地	口縁部残存量	器種別%	機能別%
土師器	小皿	南伊勢	34	29.0	64.9
	皿		42	35.9	
	鍋		11	9.4	9.4
	ロクロ皿		3	2.6	2.6
土師器計			90	76.9	76.9
陶器	椀	尾張	6	5.1	
		渥美・湖西	20	17.1	
陶器計			26	22.2	22.2
白磁	椀	中国	1	0.9	0.9
総計			117	100.0	100.0

第15表　かん志ゆう地区ＳＫ２出土遺物組成表

※口縁部残存量は口縁の1/12を１として集計した。

材質	器種	産地	口縁部残存量	器種別%	機能別%
土師器	皿	南伊勢	16	8.7	8.7
	鍋		19	10.4	10.4
土師器計			25	19.1	19.1
陶器	皿	尾張			
		渥美・湖西	26	14.2	
	皿計		26	14.2	14.2
	椀	尾張	29	15.9	
		渥美・湖西	93	50.8	
	椀計		122	66.7	66.7
陶器計			148	80.9	80.9
総計			183	100.0	100.0

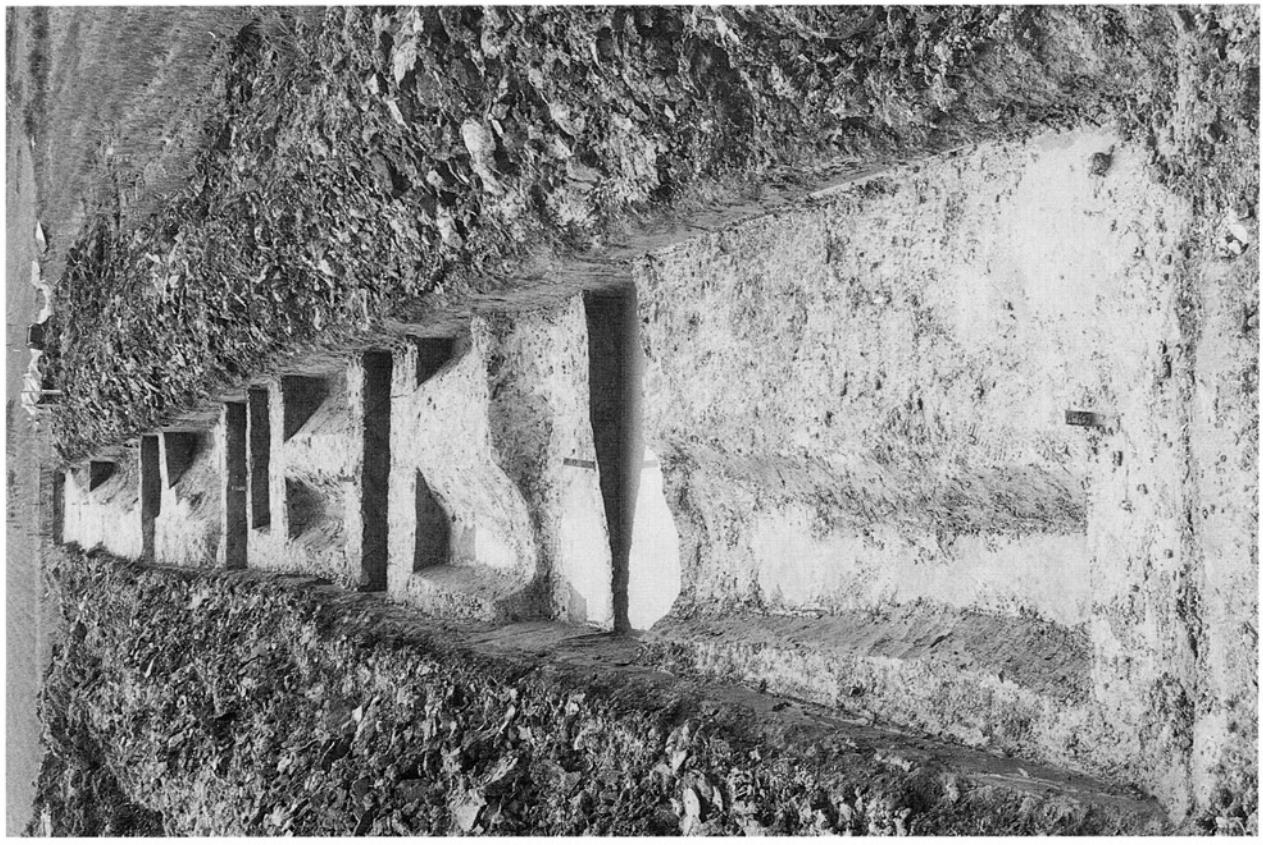
第16表　かん志ゆう地区ＳＫ５出土遺物組成表

材質	器種	産地	ＳＤ１	ＳＫ１	ＳＫ２	ＳＫ５
土師器	小皿	南伊勢	112	30	13	
	皿		296	186	87	16
	鍋		790	96	98	27
	ロクロ皿		9	1	4	
土師器計			1,207	323	202	43
陶器	皿	尾張	9			
		渥美・湖西	39			5
	皿計		45		2	5
	椀	尾張	186	26	18	33
		渥美・湖西	516	62	47	116
		不明	2			
	椀計		704	88	65	149
	鉢	尾張	13			
		渥美・湖西	6			
		不明	1			
	鉢計		20			1
	壺	瀬戸	30			
		常滑			2	
		渥美			1	
	壺計		30		3	
陶器計			806			175
瓦器	不明	大和・伊賀				1
白磁	椀	中国	1			1
	不明				1	
白磁計			1		1	1
青磁	皿	中国	1			
総計			2,022	302	273	220

第17表　かん志ゆう地区破片数量

図版 9

A 地区　全景（南から）



A 地区　全景（北から）

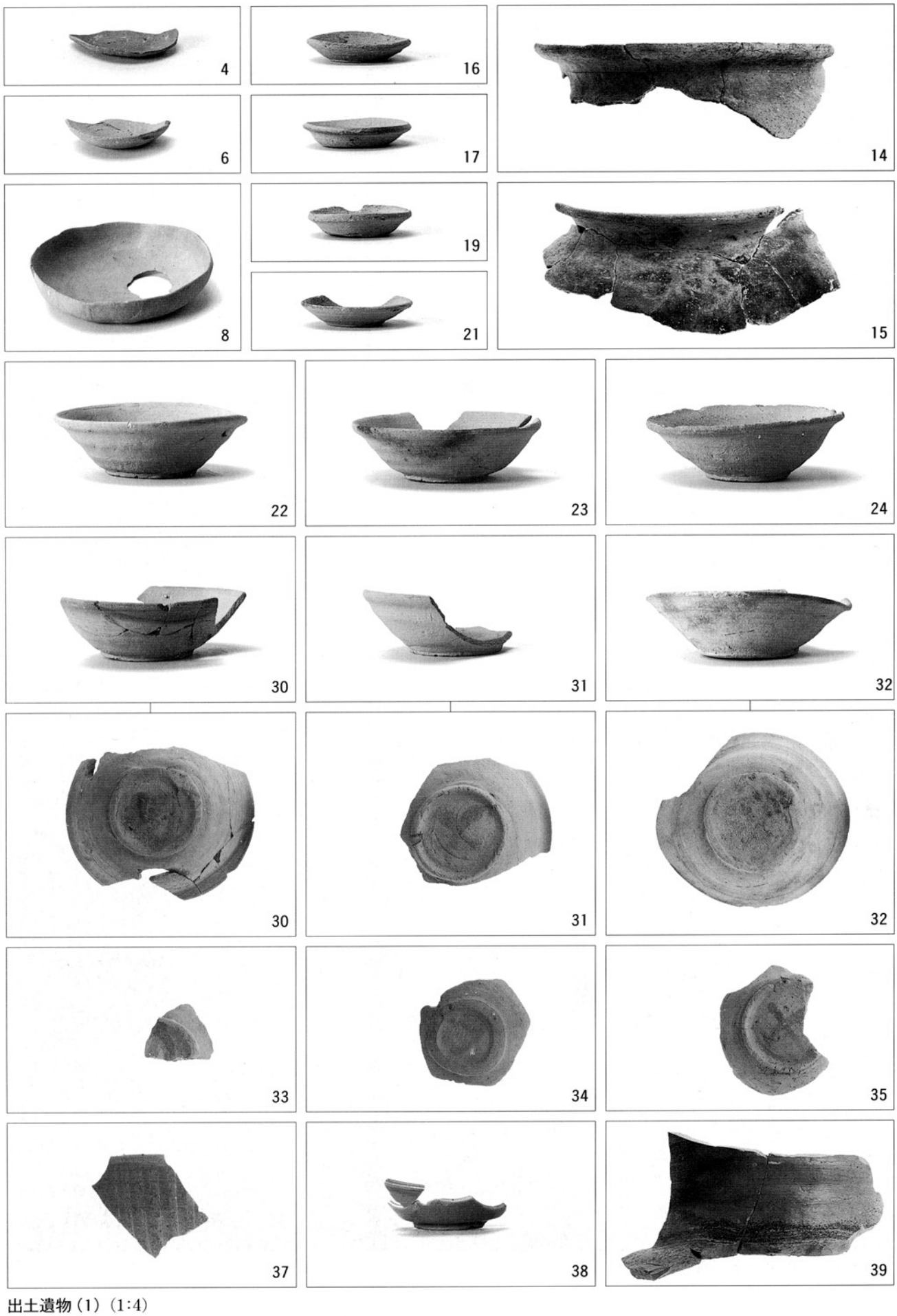
A地区　ＳＤ１－ａ・ｂ土層断面（北から）

B地区　全景（南東から）

図版11

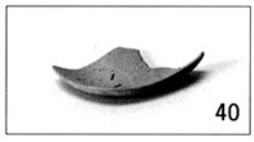
B地区　ＳＢ７付近（南から）

B地区　ＳＫ４～６（東から）



出土遺物（1）（1:4）

図版13

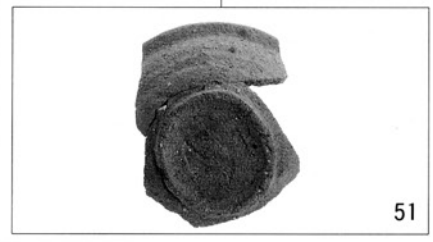

40

49

41

42

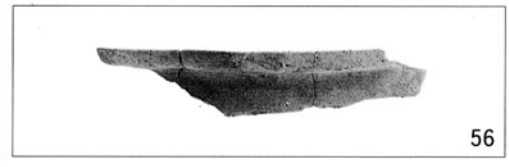
51


51

50

52

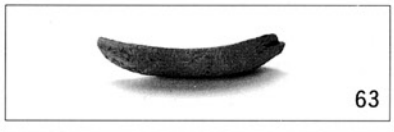
53

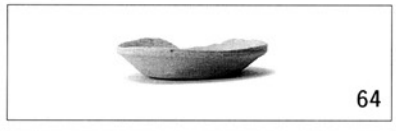

56

59

62

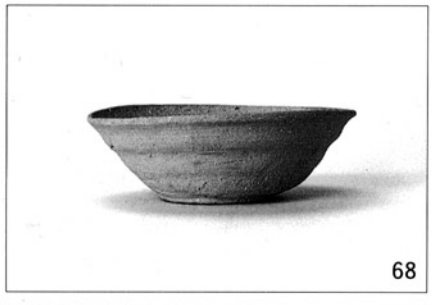
67

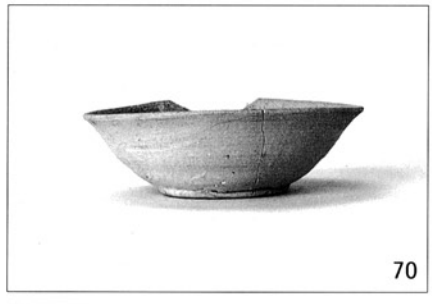

63

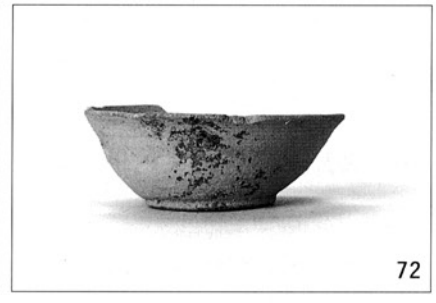

64

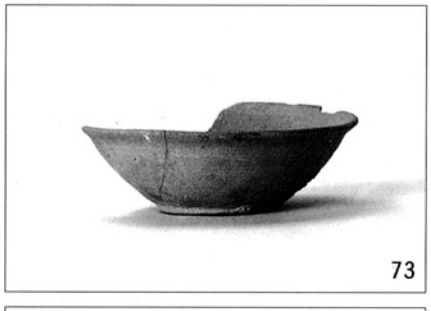
65

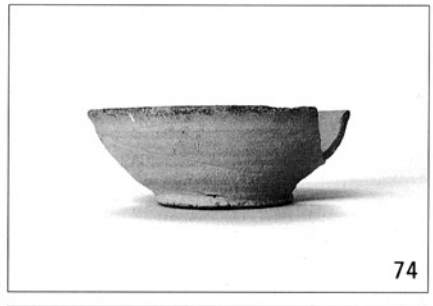
66

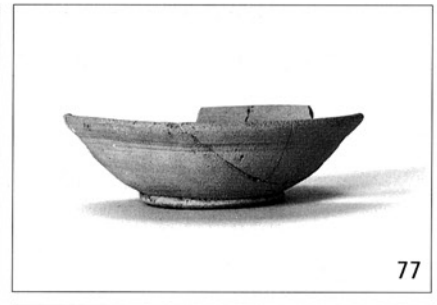

68

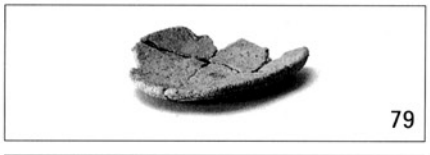

70

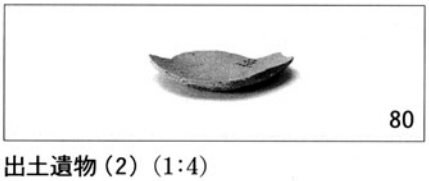

72

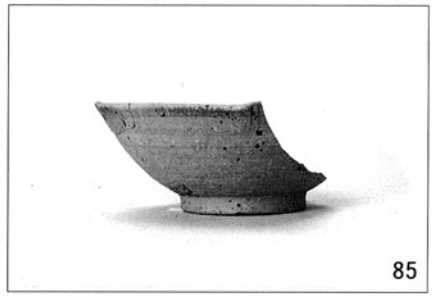

73

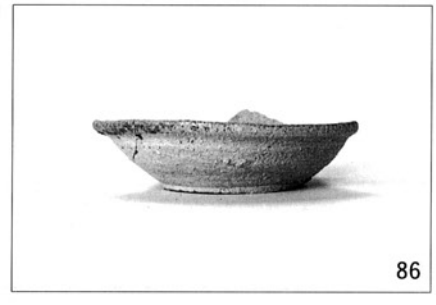

74


77


79


80


85


86

出土遺物（2）（1:4）

報 告 書 抄 録

ふりがな	くしだちくないいせきぐんはっくつちょうさほうこく
書名	櫛田地区内遺跡群発掘調査報告II
副書名	池ノ端地区、かん志ゆう地区
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１４６－１－１
編著者名	前川嘉宏、木野本和之、高田恵理子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川５０３　☎05965－2－1732
発行年月日	１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
いけのはたちく 池ノ端地区	みえけんまつさかしくしだちょうあざいけのはた 三重県松阪市櫛田町字池ノ端			34°33′00″	136°35′25″	19961016 ～ 19961025	200㎡	県営圃場整備事業 （櫛田地区）
じちく かん志ゆう地区	みえけんまつさかしくしだちょうあざかんじゆう 三重県松阪市櫛田町字かん志ゆう						210㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池ノ端地区	集落跡	室町～ 江戸時代	掘立柱建物、溝、土坑、竈、土坑墓	土師器、中・近世陶磁器	
かん志ゆう地区	集落跡	鎌倉時代	掘立柱建物、溝、土坑	土師器、中世陶器	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告146－1－1

櫛田地区内遺跡群発掘調査報告II

池ノ端地区・かん志ゆう地区

1997年 3 月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　(有)第一プリント社